

に對して基督教の特色たる、神と人間の間を父子の關係に於て考察せんとする傾向は、一種條件附の形式の下に、イスラエルの古宗教中にも、夙に發現せるものと謂はざる可からず*。

* イスラエルは我子なり(出埃及記、四、二二)

我(神)はイスラエルの父にしてエブライムは我(神)長子なり(エレミヤ。三一、九)

矧や初より神人同格教的傾向の宗教意識に於てをや、人の中に神を見、神の中に人の存在を許す、寧ろ當然のことたるなり。是れ佛教の開祖釋迦は、矢張佛即ち宗教學上の神にして、歐洲に傳はりし基督教が三位一體説を、その教理の中に生み來り、耶蘇は人にして神、神にして人の結論に到達せし所以なり。是れ正統派の基督教なり。之に反して教主耶蘇を單に偉人として見、之に何等の意味に於ても神性を認め來

らざるユニテリアン主義は、基督教哲學としては、高尚にして深遠なるものあらんも、宗教的意識は之に由りて決して満足せず、依然基督教界の實勢力は、新舊兩教を問はず、依然其正統派に歸しつゝある所以なり。こは耶蘇在世に在りても、神人の接觸同交の意識を、父子の親愛に於て充足せし耶蘇と、彼の哲理思辨に由りて、神を天上遙に祭り上げ、九重の雲漠々裏に葬り去りて、超絶神教 *Deism* を稱道せしフイロン *Philon* との相違の、由りて起こる點にして、猶太の哲學者フイロンの二元論的超絶神教を以てしては、到底實勢力ある宗教と爲すこと能はず、實際社會人心に貢獻せる實宗教の創立者改造者の月桂冠は、そが耶蘇の頭上に落ち來りしも亦之が爲めなり。然れば人の中に神を見、人性中に神性を發見することは、決して不當のことに非ずして、寧ろ宗教意識としては當然のことなり。宗教意識の哲學的意識と異れる特色は實に

此に存す。宗教意識にして發動せざらんか則ち止む、苟も宗教意識にして活現し來らんか、人間の中に——天然の中にも——神を發見し來ることとは、自然の結果なり。而てそは神人同格教系に於て早くより最も明白なる發現を爲せり。この神人同格教的特色即ち宗教の人本主義が、我國に於ても文化未發達の時代に於ては、世界各國の實例と同じく、自然的宗教の中に存し、天然に對しては或は多靈教的(生氣主義的)自然論 Animistic naturalism として現はれ、人間に關しては自然教的の人間崇拜 naturalistic anthropolatry となりて表はれ來りしも、そが、人文現象の發達共に、自然界に關しては萬有神教的の自然論 Pantheistic naturalism に進展し、人間に關しては倫理的的精神的の人間崇拜 Ethico-spiritualistic anthropolatry として向上し來れるを見る。即ち自然と人生とに於て直接に神を見し兩形式も、共に倫理的宗教期に入りてその大成を見たるものにして、

倫理教期
現はれ
たは
神然

こは余の嚮者に引照せし史實に徴して明かなる可きを以て、更に爰に之を贅せざる可きも、我國の宗教思想をして發展淨化、以て此に到達せしむるに至りしは、儒佛思想の影響する所、亦決して少からざるものありしを忘る可からざる事實なり、換言せば、我國の宗教思想の根幹を培養せしものは、儒佛の肥料に待ちしものありしや、又否定す可からざる事實なりとす。今此點を明にせんが爲めに更に一例を附加して、佛教てふ神人同格教が、その萬有神教觀 Pantheism と觀念論 Idealism 又は唯心論 Spiritualism とを以てして、以て能く同じく神人同格教たる我日本の信仰界に貢獻し、我國固有の祖靈崇拜と、之を外にしては宇宙の大靈と、之を内にしては自己分内の心神とを融合相即し來りて、我宗教思想を醇化せる過程を考察せんとなす。

兩部神道口決に曰く、

第四章 比較宗教學上より見たる日本人の神觀

祭_ら自己神、先祖神、祭_ら天地神、一也、既_に祭_ら自己神、不可_し不_し祭_ら先祖神、蓋_し分_り異_{なり}故也、未_だ祭_ら自己神、難_し以_て祭_ら先祖神、天地之神、功夫_を祭_ら天地之神、則_ち祭_ら先祖之神、自己之神也、再_り重_ん功_を夫_を。

以上論明し來りたるが如く、宇宙の最大原理たる神は、元是れ無差別平等にして絶対なり、不可稱不可説なり。そは眞如なり、實相なり、遍一切處なり、無始なり、無終なり。基督教に在りては、時に之を全知と呼び全能と教へ、佛教に在りては、光明無量、壽命無量と説く、こは既に絶対なる神の象徴的表現 Symbolical expression なり。宗教的意識の此具體的象徴化的活動は、遂に純沒我的にして崇高なる徳性を具備せる師主、聖者、偉人、英雄に神の活現を認むることとなり、北畠親房の云へる、精明在身、志氣如神、身正心明、我身即神を一身の中に實現して、明津神に在す天皇に絶対の神の顯現を拜するに至るものなり。是れ日本の神道が、その

四圍の事情關係上、尙國民的宗教たる位置に止り、而も時勢の趨進と儒佛等の影響とに由りて、著しく倫理化し、精神的に淨化するに至れば、勢此に出で來る可きものにして、彼の世界的宗教たる佛基二教が、その教主に或は神佛を、或は神の子を認むるに至りし如く、倫理教期に入れる我國民的宗教意識が、我が有徳なる天皇に神性の發現を拜するに至りしは、決して偶然に非ざるなり。親房の語明かに之を證す。斯くして自然教期より倫理教期に互りて、連綿以て我皇帝崇拜の存在し來りし徑路を知るを得可きなり。余が友人ライシャワ氏此頃日本佛教に關する一著を公にし、左の言を爲せり。氏も亦漸く我が日東帝國に瀰蔓せる神人同格的思想の幾分を理會せるものと謂ふ可き乎。氏曰く、

“The late Emperor Meiji and Admiral Togo (?) are being rapidly enshrined in the hearts of the common people as superhuman beings. This may seem strange

to the Western mind, but it is a very natural process from the Buddhist or Shinto standpoint which refuses to make a clear-cut distinction between the human and the divine." (Reischauer, Studies in Japanese Buddhism, p. 230).

第五章 神道の眞生命と世界的宗教

神道に表はれたる神人の接觸同交——神道に表はれたる祈禱——神人の特種中保者——神道の神話と神學——神社と氏子及び祭禮——神道の萬有神教化と觀念論的(唯心論的)表現——神及び人としての天皇——神道の精華——我が精神界に於ける神社の位置——國民的宗教の運命と我神道の特種なる發達——儒教の日本化——佛教の日本化——神道思想の獨立——猶太の彌尸詞及び印度の轉輪聖王と日本の天皇——倫理教期に於ける神道の根本義——(至誠即ち正直)——世界諸宗教の融合歸一

以上章を逐ひて日本人の國體觀念と、その背景となれる宗教意識の特性を研究せり。今此立場よりして神道を考察するに、神道に宗教的形相の存すること明かにして、則ちその一表現は神人同格教なることは是れなり、而もこゝにも宗教の一大特色たる神人の接觸同交、神人の共

はれたる
神人の接
觸同交

在俱存、又は神人の融合歸一の意識は、顯然として存し、炳焉として露はるゝものなり。故に黒住宗忠は曰く、

天照す神の御腹に住む人は

限り知られぬ命なるらむ(黒住教々書、一七、二八)

又曰く、

天照す神の御心人心

一になれば生き通しなり(同上)

と、是れ保羅の所謂、

我は神の中に動き生き而して在る(使徒行傳、一七、二八)

にして以弗所書の所謂、

神は萬人の上に在り萬人に貫き萬人の中に在り(四、六)

なるもの、真宗の開祖親鸞の所謂、

煩惱に眼さへられて

攝取の光明見ざれども

大悲ものうきことなくて

常に我身を照すなり(親鸞、和讃)

に非ずして何ぞ*

*攝取心光常照護(親鸞正信念佛偈)

古代神道の忠實なる研究家本居宣長は曰く、

世の中は何につけても神を思へ

神のめぐみをゆめわするなよ(平田篤胤、玉津引用)

と。是れ豈に耶蘇が「一枝の百合花」、「一羽の雀」にも神の榮光の顯現を見たるものと、同一思想に非ずや。

大日本史(二六四)神祇志に曰く、

都農神社……祀大己貴命……神功皇后之征韓也、祈神安其靈於御

船以鎮護衆、終奏奇勳(吉川中七本、五四六)

故に明治天皇御製に曰く、

世の中のことある時に世を守る

神のみいづはあらはれにけり

靈元天皇の御製に曰く、

萬代を神のまに〜咲く梅は

匂も春もともにつきせじ(歷代御製集、五、二九三)

光格天皇御製に曰く、

さかゆるも神の惠の深緑

世々の久しき住江の松(同上、四五八)

こは一枝の梅香、一株の青松に神の大能顯然たるものありて存するを詠じ給へるものなり。加茂規清に至りては、神道を全然神人の交通關

係と見て、教へて曰く、

神道は、實に己を捨て、神明合一に至るの神法なり(加茂規清、

神道烏傳拂除抄)

と、明治天皇の御製に曰く、

目に見えぬ神の心に通ふこそ

ひとのこゝろの誠なりけれ

と。是れ豈に神人の接觸同交を義とする宗教意識の精華に非ずや。

橘三喜又曰く、

生れ來ぬ先きも生れて住める世も

死しても神のふところの中(神道庚申縁起、神道叢説、一五七)

と。以上は是れ實に Theism 有神論 Pantheism 萬有神論 Panentheism 萬有在神論の信仰の參差として入り亂れたる麗はしき宗教意識の發表な

りとす。説き來れば御即位式の際に於ける大嘗祭は、皇祖皇宗の神々と新帝御自身御食奉られて、此に神人の接觸同交てふ御經驗を親らし給へるものと拜察するを得るものにして、こゝに一層大嘗祭のいと神々しき御儀なることを知り得可きものとす。その神々しきは一に神人の聖交てふ點に在りて存し、而もそは決して物質的に非ずして精神的なるの點に在るなり。

更に方面を一變して、宗教の大黒柱てふ定評ある祈禱の有無に就きて之を考ふるに、神道にはその自然的宗教の時代に於ても、將又倫理的宗教の時期に入りても、祈禱 Prayer の存するは何人も否認すること能はざる事實なり。一例を挙げんか、延喜式の祝詞中、祈年祭祝詞の如き、廣瀬龍田の兩神に、風雨の災害無く、五穀の豊饒を祈願するが如き、又黒白兩馬を獻じて大和丹生川上の神社に止雨祈雨の祈願を掛くるが如

神道に表
はれたる
祈禱

き、明白なる宗教史上の祈禱なり。

* 日本紀略後篇、一(醍醐、延喜)に曰く、
十年七月十日、日來災旱、詔諸國神社山川奉幣投牲(系、五、七九一)

文德實錄(二)に曰く、

詔以遠江國角避比古神、列官舍、先是、彼國奏言、此神叢社、瞰臨大湖……湖有
一口、開塞無常、湖口塞則民被水害、湖口開則民致豐饒、或開或塞、神實爲之、請
加崇典、爲民祈之、利從之(系、三、四六一)

大日本史(二五六)神祇志に曰く、

奈良神社、傳言祀下毛野國造奈良別命、文德即位、列官舍……慶雲二年此神
放光……有陸奥夷賊之亂、發兵征討、軍士乃奉神靈、轉鬪而進、所向無敵、老弱
在行、咸免死傷、和銅四年社中忽有涌泉、灌田……又每有疾疫、禱即有應、人命
所係、請崇奉焉、至此從之(吉川半七本、三〇九)
又曰く、

大山神社……稱燒火明神……相傳、後鳥羽上皇之幸本國也、海上夜暗、不知
所向、上皇憂之、舟子曰、本國有大山之神、祈之、必示神火、上皇命、祈之、忽認火光、

因得^{りて}著^る岸^に隱^る岐^古記^凡舟人過^る北海^者往々有^り被^る神佑^者云^ふ同上^四七二

大日本史(二六一)の神祇志は杵築社文書を引用して曰く、

後醍醐帝御船上山下^に救出^せ雲國造曰^く王室再興^必頼^る神明靈佑^將特仰^す
大社冥助^を以^て誅除^せ逆^臣國造宜^に致^し精誠^を以^て祈^る官軍^の戰勝^を果^{して}歸^せ靜謐^に恩賞^必
依^ら請^に又^に使^じ獻^じ神劍^一口^を以^て禱^し安泰^及反正^奉肥後^八代郷土田^を以^て報^す
賽焉^(吉川半七本四五七)

と。山崎闇齋が神道五部書の語を藉りて、

神垂^は以^て祈^る禱^を爲^し先^と冥^加以^て正直^爲本^(垂加草一、二)

と教へ、光格天皇の櫻町上皇への御消息には、

扨て日々雨をねがひ候事、今朝も拜の時、又内侍所にても誠心に祈り申事にて候*
*本居宣長、玉勝間、一四、本居全集、四、三二六参照

と示し給へり。明治天皇の御製に又曰く、

とこしへに民安かれと祈るなる

わが世をまもれ伊勢の大神*

*大日本紀略後篇、一(醍醐、延喜)に曰く、

五年七月十八日、奉^幣伊勢神宮、依^る早^也(系、五、七八四)

十七年十二月、依^{りて}井泉枯盡^給祭文^を於^て神祇官^に令^り祈^り申^す伊勢以下諸社(系、五、八〇一)

と。續拾遺和歌集の前攝政左大臣の歌に曰く、

國安く民ゆたかにと朝夕に

かけてぞ祈る神のゆふしで

孝明天皇の御製に曰く、

神ならば我心をもしろしめし

ひたすら願ふことをうけませ(歷代御製集、六、五八七)
たてまつるその幣をうけまして

國民安くなほ守りてよ(同上、六〇〇)

宗尊親王の、伊豆箱根の二社に、詣で給ふや、その獻詠に曰く、

たのむぞと云ふもかしこし伊豆の海

ふかききこゝろは汲みて知るらむ(瓊玉和歌集、九、群書類従、

二三〇、經濟雜誌社本、九、五八)

と。又曰く、

民安く國治まれと身ひとつに

いのることゝろは神ぞ知るらむ(同上)

百敷や天照神の宮柱

君がみかけをさぞ守るらむ(同上)

坂士佛に至りてはその流麗の筆を以て、神道に於ける祈禱の極致を道破して、餘蘊無し。曰く、

當宮參詣のふかきならひは、念珠をもとらず、幣帛をも捧げずして、心に祈る處なきを内清淨と云ふ、潮をかき水をわびて、身に汚れたる所なきを、外清淨と云へり。内外清淨になりぬれば、神の心と吾心と隔なし、既に神明に同じ、しからば何を望みてか、祈請の心あるべきや、これ眞實の參宮なりとうけ給はりし程に、渴仰の涙とゞめ難し(太神宮參詣記、群書類従、經濟雜誌社本、一、九四〇)

と。

神道には既に祈禱あり、故に又祭祀禮拜の儀式自ら生じ來り、こゝに神を祭る専門家たる祭司の出で來るは必然の數にして、我國にては、上古より中臣、忌部兩氏の之を分掌せるあり、又淳名城入姫、豊鍬入姫の如

き、或は日本大國魂神或は天照大御神を祭る特種の祭司たる御杖代なり。その他齋宮伊勢齋王(加茂齋院(春日)の如きものありて、或は男或は女、以て神人の中保者となるものなり。又巫神主、審神者てふ如きもの、我國の太古より存せしは、又之を明證す。蓋し巫とは橘守部の云へる如く、御神の子てふ義にして、神の一時その人に乗り移りて、所謂神憑せる者、希臘語にて所謂 *Entheos* 希伯來語の所謂預言者 *Nabi* なるものなり。バビロニヤの神話に於てはナブ *Nabu* (*Nebo*) なる一神はマルヅック *Marduk* なる一大神格の御子(巫神にして、マルヅックの神意を他に傳達する職を掌る神なり。而てその神名ナブ *Nabu* はイスラエルの預言者 *Nabi* と畢竟同一語源に出づることを思へば、我國の巫なるもの、御神の子として、神憑を受けて、人間に神意傳達の中保者たるの義、極めて明瞭なりとす。神主、審神者亦巫と大同小異の役前を演ずるもの、殊に

審神者に至りては、全然 *Entheos* にして、神のその人に來格して、神託を下す中介 *Medium* となるものなり。神功皇后の三韓を征せらるゝや、烏賊津使主なる者、審神者となりて、天照大御神の來格を得、以て其託宣を傳ふるが如き、顯著なる一例なり。這種の事實は、又神道の宗教的形相を、遺憾なく物語れるものとす。

更に進みて宗教の一大要素たる教權即ちオーソリチーが、神道に在りては、如何なる表現を爲し、かを稽查するに、神道は國民的宗教なるが故に、佛基二教の如く、或は教祖若くは經典に、教權を求めずと雖も、その教權は遙に強大なる邊に在りて存す。則ち元來國民的宗教たる神道は、國家の權力を以て、直ちにその教權となすものなり。是れ彼の十六、七世紀の交に於ける我國新來の天主教が、神社佛閣を敵視して、之を破壊し、到底我國風と一致せざるを觀破せらるゝや、徳川氏に至り、遂に

之を以て國家を危くするものと認め、干戈に訴へて迄も、斷然之を禁止するに至れり。此場合國家の權力は、直ちに又國民的宗教たる神道の教權に外ならざるものとす。

自然的宗教の時代に在りては、神話 Mythology の宗教に伴ふこと、是れ又前に一言せし所なり、而てこは又古事記、日本紀、風土記、延喜式の祝祠等に於て參見せることは、更に贅するを要せず、卜部家の神道説等出づるに至りては、こは全く神道の神學 Theology とも稱す可きものにして、記紀の神話、卜部家等の神道説は、尙希臘古代の宗教にホーマーの神話あり、中世の基督教に神學の附隨するに比す可きものとす。

更に神社と氏子との關係を考察し來れば、そは畢竟教會と信者との關係を國民的宗教の中に移して見るものと云ふを得可く、こゝにも亦人は彼の宗教の根本的要素たる神人の接觸同交の事實存することを

發見するに苦まざる可し。此點は佐藤信淵翁のその著、農政本論に於て、論明せる所極めて適切なり。借りて以て余の敘述に代へん。信淵翁は曰く、

凡そ諸國諸邑に生土神うぶぢまの無き所なし、既に生土神の社あれば、必ず其祭祀のある可き、亦論を待たず、……夫れ一國の生土神は、一國の人民を守護し、一郡の生土神は一郡の人民を保護す。故に一國一郡の鎮守は、各人心の依頼する所なり。然れば之を敬祭して福を降すの祈を爲さざるを得ず。貞永式目に云、神者因よ人之敬而増し威、人者因よ神之德而添ふ運、然則恒例之祭禮、不可か不敬也、即ち是なり。故に祭は敬を盡し、且神を勇め奉るには、氏子皆悉く歡呼舞踊して、老若男女皆樂を極む可し。……生土神の神輿を昇出し、……神事を鬧興にぎやか行するときは、祭所の神も、皆大に勇立いさて、樂給ふ疆無く、吉祥を

降す殊に繁く、氏子等も亦大に賞豫たのしみて歡び勇むこと疆なし。……不
 味軒翁云、凡田舎祭の極意は其處の人民の魂を生土神に糾縛しほりて、其
 郷くわむらに綁くわ著つさす靈法なりと、……實に知言なるを知る（農政本論、後編中
 の下、二一—二七）

神道の祭典に於て、神社と氏子との間に表はれたる神人の接觸同交の
 狀を、説き得て明瞭なりと謂ふ可し。

既に云へる如く、神道は神人同格教にして、人間と天然との中に神を
 見る者にして、これは神道の自然教期に在りても、將又倫理教期に在りて
 も、異なる事なし。唯等しく天然の中に神を見ると云ふも、その自然教期
 に在りては、多靈教的（生氣主義的）自然論 Animistic naturalism なり、之に反し
 てその倫理教期に在りては萬有神教的自然論 Pantheistic naturalism の位
 置に達せり。これは神道が佛教と握手するに至りて、佛教の哲理に富め

神道の萬有神教的
 自然論の唯心化
 的表現

る萬有神教即ち汎神觀を攝取せし結果に外ならず。佛教の眞如即萬
 法萬法即眞如の哲理より一色一香無非中道となり、草木國土悉皆成佛
 を主張し、谿聲に佛說法の廣長舌を聽き、山色に如來の清淨身を觀じ、
 青々翠竹は盡は眞如（元享釋書、一七、系、一四、九、二一）鬱々黃花無非般若（元享釋書、一七、系、一四、九、二一）
 の理を達觀する佛教哲理を、神道界に移植せば、

空晴れて嵐に松の響こそ

あらはれ出でし神の心よ（和論語、一、三五）

ともなり。心學者中村徳水の所謂、

草木國土悉皆成佛なる譯などを知り、萬物は皆神の御姿なりとも
 知られ、萬事が大切になり、有難くなります。歌に、

天地の中に生へたる草も木も

神のすがたと見つゝおそれよ

との信仰ともなり、或は又

世の中は草木もともに神にこそ

死して命の有りかをぞ知れ

の教ともなりて、神道の教理に萬有神教觀を攝め、元來多神教的なる神道の神々は、その理論の根柢として、汎神觀を獲得するに至れるものなり。北畠親房曰く、

凡我國は陰陽二神產生の國也、山川草木迄も皆神名ありて、山神をば大山祇……水神……罔象……海神……少童命……水門神……速秋津日命……總て一塵一物も無不有神、手足にも觸れ、耳目にも當る時は、是神なりと知て可驚也……矧上仰天見、日神照晝、是皇祖大日靈尊坐、月神照夜、此又月讀神也……級長戸邊風神吹撥氣也、人生氣出入すれば念々氣息即此神にて坐す、然れば出入の氣をも不

可濫……稻穗の食、無不神體、無非神恩……(二十一社記、神道叢書、一、一九、二〇)

と。和論語の作者又曰く、

吾神明は法の中には日天子、又は大日遍照也、垂跡を滄海の龍神にあらはれまして、三界の衆生の願を叶へます……天地萬物皆我神明なることを知る可し(一、四二)

神道は元來現世主義にして、來世死後の冥福に希望を繋げるものに非ず、故に夜見國に對して顯國即ち蜻蛉國たる此世はその唯一の希望なり。而も這種日本古代の朴素的なる現世主義は、更に一層深き意義を闡明し發揮せられざる可からず。此に於てか神道は華嚴真言の事々無礙法界觀と握手し來りて、その教理を攝取して、即事而眞の妙諦より神道の現世主義を解釋し來らんとするは自然の趨勢なり。斯くして

天照大御神と廬舍那佛(大日如來)との習合は自然の結果なりとす。

更に人間の中に、神性を見たる方面より起れる、神道の神に就きて觀察せんか、嚮者に既に攻究せしが如く、自然的宗教の時代より、倫理教期に入るに及びて、依然崇高なる意味に於ける人間崇拜を惹起し來りしを知る。等しく皇帝崇拜なりと雖も、北畠親房が、

不正祈禱、天地不與、非禮報賽、神祇不享……精明在身、志氣如神……

身正心明、我身即神也、天皇詔書、明神天皇とあるも此義也(二十一社

記、二〇)

と云へるは、倫理期に於ける皇帝崇拜即ち人間崇拜の精華にして、一條兼良は、

天照大神、事何神、而齋戒曰祭天神也、或自齋心神也、所謂齋戒神明其德也、雖非祭、每事齋誠、是心即神也(日本紀纂疏、三、一五七)

と解釋し、又

可知神明之正體、即衆生之心性、諸佛之本源也(同上、二、六一)

と斷ぜり。是れ黒住宗忠が、

神佛己が心にましますに

他を祈ることおはれなりけり(黒住教々書、三四)

と云ひ、淺井利賢が、

身はやしる心に神をもちながら

餘所を問ふこそ愚なりけれ(中臣八箇傳、神道叢說、三、一一〇)

と歌ひ、室鳩巢が、

神を遠き事とな思ひ給ひそ、たゞ我心に求め給へ、いかにとなれば

神は神明の舍なり(駿臺雜話、一、日本倫理彙編、七、一〇五)

と教へ、琉球神道記の著者が、

八幡の表示は……世人八邪に沈む彼を八正道に入んがために、八と顯はれ給ふ也……此八正に住すれば衆生即八幡大菩薩也(五卷、一五一―一六)

と云ひ、更に和論語の作者が、

みな人の直き心ぞそのまゝに

神の神にて神の神なり(和論語・一三二)

あめにならひ地にうけたりし人心

まがらざりせば即の神(同上、一三三)

と云へるものに外ならず。此に至りてマクス・ミュレル Max Müller が宗教は自然民族の間に行はるゝ人間崇拜たる Anthropological religion より更に進みて Psychological religion に向ひて趨進發展す可きものたることを、印度に於ける宗教思想發達の跡に徴して、説明せしものを、今又日

神及び人
としての
天皇

本の宗教思想發展の徑路より、立證することを得たるものとす。

今更に之を上御一人の場合に於て考察し奉るに、日本人の神觀は神人同格教にして、元來人間たる天皇に神性を拜するを以て、天皇は一方より之を考ふれば人なり、然れど、他方より之を拜する時は神なり、上御一人にして、此兩面を具備せらるゝなり。是れ即ち人間的に之を云へば、皇位と稱す可き所のものも、宗教的に之を云へば、神位なり。古今天皇は明津神に在すと同時に、湊合家族制の族父に在せり。是れ尙印度に在りては釋迦の一身に、神性と人性とを具備せるものと、同一轍に出づ。故に天皇は下、人民に對せらるゝ時は即ち現人神なり、明津神なり。之に反して上、皇祖皇宗の神々に對せらるゝ時は、人間の位置に在す者なり。こは既に太古の祝詞宣命等の文字之を證明して餘あり。他の例を借りて之を云へば、神社と陵墓とは、所詮は遂に同一に歸せんも、尙

其間區別無き能はず。彼の神武天皇畝傍の御陵と、橿原神宮との間には、又自ら區別の存するものあり、御陵とは人間たる天皇を葬れる箇所を意味し、之に反して神宮はその神性を崇拜せんとして起れるものなり。桃山の御陵と明治神宮との區別亦こゝに存す。而も日本人の神觀は神人同格教なるが故に、此兩者の區別は、禮拜等の實意識としては、時に全く没却せらるゝことあるを記憶せざる可からず。斯く天皇に人性と神性との兩者ありて存することを知る以上は、爰に吾人は、彼の明治天皇の崩御前に於ける、二重橋前の、不可思議なる光景を解するの鍵を握れるものなり。即ち彼の聖帝の御大患に際し、その御惱の平癒を二重橋前に跪坐して、熱禱せる幾多陛下の赤子あり。こは天に祈るかと思へば左にも非ず、唯聖帝の在す宮城の方に向ひて、陛下の御惱平癒を祈り奉れるなり。こは抑何を意味

するか。曰く他無し。御惱の平癒を祈られ給ふは人としての皇帝に在すなり、之に反して赤子の向ひて以て熱禱を獻げんとするは、神としての皇帝なり。同一天皇にして此兩方面を有し給ふが故に、此に先帝崩御前に於ける二重橋前の光景の如き、一見して不可解の狀を呈するに至るものとす。何となれば今や將に崩御せられんとする天皇に、直接その御惱平癒を祈らんとするが如きは、眞に不可解の事にして、天皇を單に人とのみ考ふる間は、そは到底解釋し能はざる所のものなり。而も二重橋前に於ける我忠良の臣民の意識は、既に説明せし如く、その皇帝に於て一半は人性を、一半は神性を拜せるの結果、事此に出でしものにして、其間何等他の奇無きものなり、否な、明治天皇の崩御前に際して、幾多の人士が、宮城に對して、先帝の御惱平癒を祈り奉れるは、神としての天皇に、人としての天皇の御惱平癒を祈願せるものなり。斯く解

釋せば、此現象は寧ろ當然の出來事に屬すと謂はざる可からざるものとす。斯く吾人は同一天皇に、人性と神性との兩方面を拜せる事實を、一二祝詞の文に於て、左に徵證せんと欲す。曰く、

現神、八洲國所知、倭根子天皇(仁明)我詔良萬止、勅御命乎親王諸王諸臣百官乃人等天下公民衆諸聞食止宣(續日本後紀、一、系、三、一六七)

と。是れ天皇が上は親王より下は滿天下の人民に至る迄、その下々に對して、萬世一系の神位を踐み給へることを周知せしめんと、の御心に出でたる宣命なり。之に反して、樞原の御陵に告祭せらるゝに當りては、同一天皇も、人としてその御告文を宣り給ふ。故に曰く、

詔曰、天皇(仁明)我詔旨止掛畏支樞原乃御陵爾申賜倍止申久、頃者御病發天惱苦比大坐、依此天下ト求禮波……崇有利……此狀乎平久聞食天……所苦平痊天國家無事久可有止恐美恐美毛申賜久止申

(續日本後紀、十、系、三、三〇一)

*朝野群載、十二、史籍集覽、新加、十八、二四七、二四八)

彼の明治天皇の御製を英譯して、世に公にせるロムバード氏は、同書の序に於て、明治天皇に於ける神性と人性との關係を、左の如く説明せり。是れ頗る肯綮に當れるものあるを見る。氏曰く、

“His faith was truly religious; and with his superb confidence in that Divine Royalty of which he felt himself to be a part, there was a marked humility which counted himself but a channel of divine favour for the sake of the nation and its people.” (F. A. Lombard, Imperial Japanese Poems of the Meiji Era, Preface).

と。

天皇に對し奉る時の日本人の意識狀態、或は又一般に神道なるものは、畢竟神人同格教にして、神人同格教の性質上、天然と人間との中に神

性を認めんとするが故に、皇位は直ちに神位にして、湊合家族制の長たる族父は、又同時に明津神に在すなり。古事記に由れば彼の天照大神の如き、亦神に在すと同時に、高天原に於て天神を祭祀せられんが爲に、躬親ら神衣を織り給へる祭司の長 Pontifex Maximus に在す者なり。こは天照大神の人間の方面なり。是れ又我國が古來祭政一致にして、顯露の事即ち俗界の事項 *Secular things* と宗教的事項たる神事 *Religious things* とは、互に表裏兩面を相成して存せる所以なりとす。是を以て伊勢神宮に在す天照大神は、皇室の御祖先に在すと云ふ點より考察せば、こは天照大神の道德的方面の表示と稱す可く、之れに反して黒住教がその宗教の對象として天照大神を奉拜し、更に之を主觀的に考へて此神は又各人の真心中に在すものなりと説き之に由りて一宗派を組織せるものあり、此事實は矢張天照大神に神的人的との

兩方面の併存せることを反映せる史的事實なりと謂はざる可からず。而て實際の場合には同一天照大神の神人兩方面は常に合同して一となり、以て人々の實意識中に活動しつゝあることを忘る可からざるなり。故に西行は伊勢神宮に詣でて、感涙に咽びて曰く、

何ぞとのおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるゝ

と、是れ西行の靈妙なる宗教意識に訴へたる神宮參拜の靈感なり。こは又西行が加茂に詣でて一夜參籠、靈感極窮して左の一首を進詠せしと同一揆に出づるものなり。曰く、

かしまるしでに涙のかゝる哉

又いつかと思ふ哀れに

と。以て彼此相對照す可きなり。故に我國に於ては、湊合家族制の長

たる天皇に對して、臣民の盡す可き忠孝の行爲は、固より道德的にして、忠孝一本の觀念を道德上より説明し得ること眞個に言を待たず。然りと雖も、その忠孝てふ道德上の觀念の、向ひて以て發動する對象に在す天皇が、元來神性と人性とを該ね具へ給へるを以て、表面上より見て忠孝てふ道德上の特性は、裏面より觀察して以て直ちに宗教的信仰とも名づく可き白熱性を帶び來り、外人をして日本人の忠孝は日本人の宗教なりと迄、極言せしむるに至りし程、著しく宗教化せられ、信仰化せられたるものあるなり。否第二章に於て縷々述べしが如く、天皇が明津神としては猶太教に於けるヤーエーの位置を占め給ひ、之れに對して發動せる我が忠良なる臣民の忠孝心は、雖て又ヤーエーに對して、その選民たる猶太人の有せし信仰心に外ならざる事を論明せり。故にそは同一物を、道德的に表面より名づけて、忠孝と稱せしものを、宗教的

に裏面より考察せば、直に又信仰なる事を知らざる可からず、何となれば神人同格教に在りては、人と神とは同一物の表裏二面に外ならざるが故に、人としての天皇に對し奉る精神状態は、又直ちに神として之れに對し奉る時の精神状態と、互に表裏兩面を相成し、そは極めて密接なる關係を有するもの、そは偶學者研究の抽象に由りてのみ、姑く之を分別して考察するを得可しと雖も、實際上具體的事實としては、決して黑白二色の相分かるゝが如く、截然たる區別を、其間に附すること能はざるものとす。故に我國に於ては、人としての天皇に忠孝を勵むと云ふことは、又直ちに神としての上御一人に己の身心を靖獻する不退轉の宗教的信仰を義とする意識状態なることを忘る可からざるなり。故にこは單に道德上より見れば、日本人特有の愛國心 Unique Patriotism of the Japanese と名づくる固より可なり。こは神道の世俗的方面 Secular

side or aspect of Shinto なり。而もそは同時に天皇に神位を拜せる國家的宗教たる神道と、表裏を相成せる事實あることを記憶せざる可からざるなり。斯く神道の世俗的方面を輔くるに、その宗教的方面を以てし、この兩者は鳥の雙翼車の兩輪の如く、相關係する所に於て、我忠孝道德の大なる強味を感ずる所以なり。故にその一を決して他より切り離すこと能はざる所のものとす。故に此兩者を渾一して考ふれば、神道の神髓精華 Essence は、宗教的色彩を帯べる、日本人特有の愛國心又は國民道德なりと云ふを得可し。若し之を外國人に説明せんか The life or essence of Shinto is the unique Japanese Patriotism touched by the nationalistic religious enthusiasm of the Japanese なりと説く、或は現代に實力ある神道なるもの、一端を、我が事情に暗き外人にも領解せしむるを得んか。古來我國に於ては之を日本魂 Soul of Japan と云へり。之を Mikadoism と稱す

神道の精華

可く、將又天皇教 Nationalistic adoration of the Emperor と名づくるを得可し。蓋し日本人の天皇に對し奉る場合の意識は、最早や單なる Respect 又は Obeisance に非ずして Reverence なり、即ち Adoration たるものなり、即ち崇拜 Worship たるに至るものとす。是れ之を神道の極致と爲す。故に神道は單なる道德的意識に非ずして、その裏面には Mikadoism, i. e., the nationalistic adoration of the Mikado ても熱烈なる宗教心の白熱状態に在るものを伴へることを忘る可からざるなり。此點に關してはナツプ氏の敘述極めて明瞭なり。氏曰く、

“.....That ancient Shinto faith.....remains to-day, not only the real religion, but the loyal heart of the land unifying the nation as could no other influence..... Many Japanese are Buddhists, some are Confucianists, Christianity claims a few; but all are of the national faith, and Shinto is not only the religion of the state,

but of the heart and life of every subject of the Island Empire. Religious faith and the national consciousness are with them as indissoluble as the Hebrews”

(A. M. Knapp, Feudal and Modern Japan, p. 184)

“.....The Hebrews, with whom religious faith and the national consciousness were so closely identified as to be practically indistinguishable.....Religious being thus kept under the glamour of a sublime patriotism, Jewish history has become a record of patient loyalty unsurpassed in the annals of the world”

(*ibid.*, p. 183)

今此のナップ氏の見解を直ちに裏書するに足る所の事實は、旅順港口の封鎖を決行したる廣瀬中佐の行動なり。而て彼れが精神の愛國的白熱状態は、正しく天皇中心の愛國教と稱するを得可し。即ちハーソンの所謂 Religion of loyalty なり。而てそは又聽て今日に生命ある神道なり。^{*}廣瀬中佐曾て句わり曰く、

^{*}The following reply, made by Vice-Admiral Togo, to an Imperial message of commendation

received after the second attempt to block the entrance to Port Arthur, is characteristically Shinto:—
“The warm message which Your Majesty condescended to grant us with regard to the second attempt to seal Port Arthur, has not only overwhelmed us with gratitude, but may also influence the patriotic manes of the departed heroes to hover long over the battlefield and give unseen protection to the Imperial forces!”

—Such thoughts and hopes about the brave dead might have been uttered by a Greek admiral after the battle of Salamis the faith and courage which helped the Greeks to repel the Persian invasion more of precisely the same quality as the religious heroism which now helps the Japanese to challenge the power of Russia.” (Hearn, Japan, an Attempt at Interpretation, p. 507.)

死生有命不足論、鞠躬唯應酬、至尊奮躍赴難不辭死、從容就義日本魂、
可見正氣滿乾坤、一氣磅礴神州在、嗚呼正氣畢竟在誠字、嗚呼何要多
言誠哉々々斃不已、七生人間報國恩、

と。嗚呼是れ豈に天皇敎愛國敎の至醇なるものに非ずや。而て鍋島論語の名稱ある葉隱集を讀むに曰く、

武士たる者は忠と孝とを片荷にし、勇氣と慈悲を片荷にして、……荷ふてさへ居れば、……立つなり。朝夕の禮拜行住座臥、殿様々と唱ふ可し、佛名眞言に少しも違はざるなり(二四〇)

と。こゝに所謂殿様々々とは一國の諸侯を指せるものに外ならざるも是れ葉隠集が徳川時代、封建の世に出でたるが致す所なり。今や皇政復古、日本人民は上御一人に直屬し、今日の日本人が殿様々と口唱する所のものは天皇陛下の外、更に是れ無きなり。故に鍋島論語の見解に由れば、日本人に在りては、天皇の御名を口唱することは、佛名眞言の口唱と同一の功力ある可しとの結論に達するは、論理必然の數なり。而て事實今日の日本人が死に臨みて佛名眞言を唱ふる代はりに、天皇陛下萬歳を絶叫せるは、日露戦後に於て、實際に證據立てられたる明白なる事實なり。下に擧ぐる第三軍司令官乃木大將の伏奏を一讀する

者は、又誰か之を疑はん。乃木大將凱旋の復命書に曰く、

我將卒の常に勁敵と健闘し、忠勇義烈、死を視る歸するが如く、彈に斃れ劍に瘡るゝもの、皆陛下の萬歳を喚呼し、欣然として瞑目したるは、臣之を伏奏せざらんと欲するも能はず……

と。事實斯くの如くなるを以て、余は皇位にして同時に神位たる天津御位に在す、天皇陛下に對し奉る日本臣民の精神状態たる忠孝、即ち乃木大將の復命書に所謂我國民の忠勇義烈なるものは、愛國教又は忠君教若くは天皇教とも稱す可き、一種の白熱状態に在る日本人の信仰心の結晶體なりと謂はんとす。ハーンの語を借りて之を云へば Religious Heroism なるものなり。そは單なる道德に非ずして一種の信念なり、信仰なり、日本人の宗教なり、是れ實に天皇教を中心とせる神道の宗教的形相なりとす。而てこの事實はシベリヤ出兵中の我戦死兵卒の中に

も表はれたり「萬朝報」の戦時通信員は報じて曰く、

死屍に現はれた信仰

日本國民は皆これ大自覺者である

我兵の屍體は仰向く露兵の屍體は俯向く

從軍記者 宮城 三郎

ハ市には目下五人の軍隊布教師がゐて、傷病者の慰問やら、信仰講話やらに活動をしてゐる、本派本願寺布教師中谷波月、道元淨見、能野靈達の三師は、諸兵の熱烈なる信仰に就て悲絶壯絶の實證を語つた——『一行が八月二十三日の夜汽車でスウイヤギナ驛を通過した際遠く近く般々たる砲聲を耳にした、二十四日拂曉クラエスフキー驛間近に下車した時、鐵道沿線には彼我の戦死屍體が累累として横はつて淋漓たる鮮血が沿道の雜草を韓紅に染てゐた、其

中へ交つて幾人かの重傷者が苦しい呻吟の聲を揚げてゐるさまは眞に惨の極であつた、一行は一々重傷者に對して佛陀の大慈悲を諭した時、何れも大なる安心と感謝を以て瞑目した、第十四聯隊第十二隊二等卒原田實は頭部に貫通銃傷を受けて氣息奄々たるものであつたが、死の刹那の彼には現世に於る一切の苦痛が除かれ間近に炎々として燃え残つてゐる敵の彈藥貨車を指して莞爾と笑ひ、聽て苦しき息の下から陛下の萬歳を高く三唱して大往生を遂げた、其壯烈なる光景、忠君愛國の念の熾烈なる彼の最期は、眞に日本軍人の好典型であつた、九月二日スウイヤギナに引返して二十四聯隊の戦死者橋本伍長以下十餘名の屍體を假埋葬に附して彼等の冥福を祈つた、其前遺留品を調べたが、第十四聯隊第六中隊一等卒高原高房の内ポケットから一葉の汗染みた葉書を見

出した、門司市に在る叔父高原某氏に宛てたもので、其文面には『浦鹽へ無事上陸したから御安心下さい』の一句があつた、浦鹽へ上陸後直に戦線に向つた彼は此端葉を浦鹽で投函する寸暇だになかつたのである、彼の國家に對する至誠は骨肉の叔父を顧みるの閑だになかつたのである、一行は此の遺留品を手にして無量の感に打たれた、忠君愛國——日本人は此大信念の爲には、凡ゆるものを犠牲とすることを厭はぬ、聖恩の洪大なる、近く其枯骨に及ぶ時、彼等は陛下に、國家に殉じた光榮に安んじて成佛することと思ふ——誰か我國民に信仰が無いと云ふ、想ふに我國民は悉く大自覺者である我等は八月二十三日の戦闘以來目のあたり憊うした多くの實證に接した、日本軍の戦線に立つや眼中何物もない、只忠君愛國の一念あるのみである、日本軍の信仰は之である、日本軍の

勇敢世界に冠絶してゐるのも之が爲である、更に日本兵の此偉大なる熱烈なる信仰が屍體の上にも現はれてゐる——第三十五旅團長三原少將の談によると、戦場に遺棄された日本兵の屍體は必ず仰向けになつてゐるが露兵は必ず俯向けになつてゐる——と、我等に其理由を訊されたが我等は日本兵の壯烈なる最期を親しく見る時に、此變つた現象が直覺的に理解された。即ち日本兵の信仰の満足が死に際して何等の不安なく、陛下の爲に命を捧げる事が彼等の終局大理想に到達したからである、そして彼等は現在に於ける日本國民の満足を天に向つて呼號せんが爲、其肉體の苦痛を忘れて仰向けとなり、心から愉悅と満足とに充ちた聲で陛下の萬歳を高唱するのである、然るに此信仰の無い露兵は現世に執着し、苦痛にのみ捉はれるからである——と(十七日午前十一時、ブ

ラゴエチエンスクに向つて出發せんとするに際して(大正七年九月二十七日朝刊)

然れども姑く分別して之を考ふれば、神道には上の如く宗教的方面と道徳的方面とありて存し、其不可分割的に表裏一體を成せる所にその實地の活動あり、國民の實力こゝに存すと謂はざる可からず、而も今姑くその道徳的方面のみより立論せば、神道は我が日本の世俗的道徳にして、即ち皇國の道なり、皇道又は王道とも稱し得可きなり。彼の佛教を毛嫌ひし宗教を眼中に措かず、之に加ふるに儒教の實證主義 *Positive* に痛く影響せられたる水戸派の學者の如き、神道の實力たる宗教的形相を故意に看過して、主として此立脚地に在るものなり故に藤田東湖は曰く、

漢天竺の道渡り來り、紛はしき故、止む事を得ず、神道の名は起りけ

ん、されば神道と云はんにも、限る可からず、或は皇朝の道、或は大和の道、又皇道大道などと、云はんもさることなるべし(常陸帶)

吉見幸和亦曰く、

萬々世に至る迄無動、寶祚隆榮、天壤無窮の道を神道と云ふ、……故に予常に言ふ、神道は王道也、國史は神書也、我國天皇の道を神道と云ふ(五部書辨説、三)

と、有栖川熾仁親王の神道總裁となり給ふや、その令旨に曰く、

伏て惟るに神道は皇國の大道、天祖の遺訓にして、皇統一系天壤と窮り無きは、即ち斯道の存する所以なり、夫皇國の臣子たる者誰か奉戴せざる者あらんや。

と。度會延佳に至りては、更に明に神道の世俗的方面を詳説して曰く、それ神道と云ふは、人々日用の間に在りて、一事として神道ならず

と云ふ事なし、君、神道を以て、下にのぞみ給ふときは仁君なり、臣、神道を以て君につかへ奉るときは、忠臣也、父、神道を以て、子をやしなふときは慈父なり、子、神道を以て父母につかふる時は孝子也、夫婦兄弟朋友の間も、神道を以て交る事ぞかし、其外飲食するにも神道あり、手を擧ぐるにも足を擧ぐるにも神道あらずと云ふことなし、神書を讀で神名など覚え、拍手祝詞など讀む計、神道ならば、農圃醫卜の術よりは猶せばき道なるべし、かたじけなくも天御中主尊、天照大神……このかた……今に絶せぬ神道なれば天地と無窮なるべきものなり……寶祚のつたはらん事天壤と無窮けんの御言たがはず……これにて神道の最上の道なる事はしるべし(陽復記、下)

此に於て更に進みて、我精神界に於ける神社の位置を考ふるに、若し神社を以て道德的に考察せば、神社の一面は、偉人英雄の追慕記念てふ

我が精神界に於ける神社の位置

道德心の結晶とも見るを得可し。和氣清磨を祀れる護王神社の如き、楠木正成を祀れる湊川神社の如き、近くは乃木大將を祀れる乃木神社の如き、皆此方面より考察するを得可し。而も神社の起原に溯りて之を考ふるに、神社は森林と墳墓との兩源泉より流れ出でたるものなるも、今姑く彼の高皇產靈尊が天津神離天津磐境を以て Fanum となし、以て天孫の將來を祈禱し給ふの聖所は、即ち是れ神社の濫觴なりとせば、神社は必ずしも古英雄の記念物に非ずして、こゝに神を請じて、將來に於ける祈願を爲さんとする聖所なり Fanum と考ふるを得るものとす。従ひてこゝに行はるゝ儀式は、學校の開校祝賀式や、新に成れる橋梁の渡り初めの儀式等と大に異なるものあり、何となれば是等は全然世俗的 secular のものにして、寸毫も宗教的特色を具備せずと雖も、神社に於て行はるゝ儀式即ち祈年祭及び新嘗祭の如き、單に世俗的行事と

のみ見ること能はざるものにして、新年祭はその年の穀物の豊饒を其年の初に於て、豫め神に祈りて以てその冥助に與からんとし、後者はその祈願成就して、年穀みのりて秋成を完くしたるを、神に感謝するの祭なり。是等の儀式に於ては、神力の冥助てふ無形の一大勢力に對する信仰の伴へることを看過す可からざるなり。嗚呼是の如きは、是れ宗教的儀禮に非ずして何ぞ。嚮者に一言せし廣瀬龍田の二神を祭れる延喜式中の祝詞に就きて考一考せば、蓋し思半に過ぐる者あらん。この祝詞の如きは全く宗教上の祈願たる性質の完備せるものなり。神道が次第に佛教化し、神佛の調和握手、漸く熾なるや、同一年穀豊饒の祈願を、神社より移して、佛寺に於て施行するに至れり。故に曰く、

左大臣宣奉勅、國分二寺年中諸僧者、所以攘災難、祈年穀也。政治要略、

史籍集覽、編外、四一〇。

と。年穀の豊饒を佛寺に祈願する時は、宗教にして、同一行事も之を神社にて執行するときは、宗教に非ずと斷ずるが如き、余實にその何の所以たるを解するに苦むものなり。然れば神社は獨り道德的に古英雄を記念する建造物たるに止まらずして、その祭祀の行事や宗教的にして、その儀式や純然たる宗教なり。之を宗教に非ずと解するものあらば、こは事實の曲解なり、神社を誣ゆるの甚しきものと謂はざる可からざるなり。而てこは又聽て、我國の神社と、西洋諸國に行はるゝ記念碑銅像と、異なる點ならずんば非ざるなり。我國の識者にして此兩者を全然同一視せんとするが如き者あるは、余の解するに苦む所なりとす。

* Cf. Reischauer, Studies in Japanese Buddhism, p. 153.

今や又眼光を一轉して、左に世界の宗教界に於ける國民的宗教 National religion なるものゝ運命と、その趨向とを觀察せんに、彼の埃及にまれ

國民的宗教の
運命的な道
の特色を
發達する

或はバビロニヤ、アツシリヤにまれ、將又印度、波斯、希臘、羅馬等、何れの古代國民の宗教も、皆國民的宗教たるものなり。而して佛、基、同等の世界(普遍的)宗教出づるに及びては、皆その古代國民の興廢存亡に伴ひて、國民的宗教にその國家と共に、その運命を共にせざるもの無く、その宗教界の霸權は、遂に之を世界的宗教たる佛教、基督教等に譲れり。然るに我國民的宗教たる神道のみは、依然として傳はりて、以て今日に至り、我が大和民族の國家組織の神髓中核を成し、而て多くの國民的宗教がその發達程度や、多くは自然的宗教期に止り、多くそれ以上に伸びざりしに反して、神道が倫理期の宗教たるに至る迄、その發達を繼續し、以て特種の存在を保持し、それが國民的宗教なるに關らず、儒佛二教より、その滋養分を吸収して、今日に於ては、倫理的智的要素の豊富なるものを包藏するに至りては、特に吾人の注意を價するものと謂はざる可からざ

るなり。而てこは何に原因するか。曰く他なし、こは我國が埃及、バビロニヤ、アツシリヤ、印度、波斯、希臘、羅馬の諸國とは大にその國情を異にし、既に建國の大精神に於て異なるものあり、その結果、上に萬世一系の皇室を奉戴し、二千有餘年來の國礎の動搖無く、以て今日に至りしを以て、その國家の權勢を以て直ちに自家の教權とせる國民的宗教たる神道は、以て國家の存續國運の開展と共に、獨り自己の存在を、完くせるのみならず、又次第に發展して倫理教期に迄漸進し來るに至りしものとす。一言以て之を覆へば、國民的宗教たる神道が、次第に發達し來りて、以て今日に於ては、儒佛の二教は勿論、基督教とも相駢びて、必ずしも遜色なき倫理的智的の宗教的要素に富めるは、一に萬世一系の皇室を、その中心に奉戴して、千萬世動き無き國家の中にその國民的宗教として、神道が存在せしに職由せるものと謂はざる可からず。故に儒教の如き佛

教の如き、或は支那の徳教あり、或は印度に生れし世界的宗教ありて、我國に輸入せらるゝに至りしも、我れに萬世一系の皇室てふ國家統一の中心點あるが故に、何れも皆此の國風國體に同化し、我國體の根柢に培ふ思想上の滋養分として、儒佛の兩者もその存在の意義を保持せるに至りしものとす。故に儒教に在りても、比較的穩健なる論語は、そのまま我が國に行はれしも、禪讓放伐を主義とせる孟子に至りては、古今我國體と合致せざる危険思想視せらるゝに至れり。山崎闇齋が孔孟の二子、若し正副の二將軍となりて、日本に侵略し來らんか、我れは直ちに軍を挈げて、之を邀撃し、以て孔孟二子を生擒せんと喝破せしが如き、皆儒教の日本化を説明しつゝあるの事實なり。而て儒教の日本化に關しては、更に一例を附加す可し、即ち釋奠の供物が日本に於ては、支那のそれと著しく異なるに至り、支那にては、釋奠の際、動物の犠牲を以て、孔夫

儒教の日
本化

子を祭りしと雖も、日本の釋奠に於ては、動物の犠牲を魚菜に代ふるに至れり。こは釋奠の著しき日本化と謂はざる可からず。古今著聞集の記事に曰く、

大學寮の廟供には、昔は猪のしゝ、鹿のしゝをも供けるを、ある人の夢に、尼父のの給はく、本國にてはすすめしかども、此朝に來りし後、は、大神宮來臨同禮、穢食供す可からずとありけるによりて、後には供せずなりにけるとなん(卷一、系、一五、一六四、一六五)。

朝野群載は亦鳥羽天皇の朝、早く既に釋奠に於ける動物の犠牲を改めて、魚菜とせしことを記せり。曰く、

永久二年……敢昭告于先聖文宣……明如日月、萬代猶因……更改犠牲、代以蔬魚、殊備黍稷(二、一、史籍集覽、一八、新加、三八六)

是れ豈に儒教の著しき日本化に非ずや。佛教に至りては、その日本

佛教の日
本化

化の著しき世間夙に周知の事實なりと雖も、今姑く神道方面と直接關係せる點に於て、二三の事實を擧げんに、天台宗より神佛調和の餘遂に山王一實神道を生み出し、眞言宗は同様の調和を兩部神道として發表し來り、以て各我が國體と同化せんと努め、此に本地垂跡の思想ともなり、曼陀羅の包容的なる、神道の神々は佛教と、容易に握手するに至れり。平安朝の佛教にして、既に斯る傾向あり、矧や鎌倉時代に出でたる新佛教に於てをや、その佛教は最早や舶來品に非ずして、純然たる日本産なり。此に於て日蓮は眞言宗の曼陀羅より轉化して、法曼羅を案出し、我國至高の神、天照大神の文字又その中に見らるゝに至れり。抑日蓮てふ名稱が既に業に日本と印度の調和を代表するものにして、日は日本を代表し、蓮は蓮花にして、印度の象徴なり。不潔な泥土の中に自己の清淨潔白を意味する泥中の蓮花の義なり。日蓮が日本的佛教を鼓吹

せしは又偶然に非ざるなり*。

* 四條金吾女房御書に曰く、日蓮又日月と蓮花との如くなり(遺文、六七一、六七二)

淨土教殊に眞宗に至りては、大谷の祖廟より發祥せる祖先教化せる佛教にして、實に眞宗は祖師崇拜より起れると同時に祖靈崇拜にして、此兩者の巧妙なる結合より成れるものと謂はざる可からず。是れこの佛教が殊に我國情に合致し、眞宗が巨然として一大勢力を我國に扶植し、織田信長百萬の軍も、なほ南無六字の城を陥るゝと能はざりし所以なり。蓋し祖師崇拜として見んか、釋迦滅後の佛教は、即ち是れにして、そは神人同格教たる印度思想の産物なり。親鸞を眞宗の開祖として崇拜するは祖師崇拜なり、之に反して大谷家より之を見れば、親鸞は依然としてその祖先に外ならず、故にその信仰の上よりせる祖師崇拜は、又直ちにその血統關係よりして祖靈崇拜となれるものなり。是れ日

印思想の自然の結合上に成りしものにして、親鸞及びその子孫は、自らそを自覺し、故意にかゝる結合を試みしものに非ず、そは寧ろ勢の自然に馴致せしものたること明かなりと雖も、その自然の結果なる所に、千鈞の重みを有するものにして、余は之を以て自然に出でたる日印の調和思想なりと謂はんとす。此點より之を云へば池上の本門寺が日蓮の墳墓より發達せし寺院たるも亦同様にして、唯此には祖師崇拜のみにして、祖靈崇拜の要素を缺ける憾みあるものとす。余は嚮者に墳墓より神社の由來せることを例證して大和の多武峯の談山神社が、元と藤原鎌足(不比等?)の墳墓に外ならざりしことを一言し、奥州平泉の中尊寺の金色堂が、佛寺にして同時に藤原清衡、基衡、秀衡三代の墳墓に外ならざること云へり。こゝにも佛教と墳墓との巧みなる結合を見出せり。而てこは實に鎌倉時代に於て敢て珍しからざる思想にし

て、吾妻鏡の一篇は各所に此事實を記載せり。今此談山神社及金色堂の二例と同じく眞宗に於て、祖師崇拜と祖靈崇拜との自然の融合歸一を見るは、大に注意す可き事項たるを失はざるなり。是れ又元來神人同格教にして、該ねて又祖靈崇拜なる我國情の下に、印度佛教の順應同化し來れる次第を見る可きなり*。

* cf. Reischauer, *Studies in Japanese Buddhism*, p. 72.

斯く純日本式佛教の勃興せしは、鎌倉時代の特色にして、日蓮宗眞宗の如きは、純日本式佛教の最たるものなり。之に反して彼の禪宗に至りては、之れと少しく氣色を異にし、一見以て鎌倉時代に於ける、支那直輸入の舶來品たるが如き感無くんば非ず、而も虚心坦懷之を考ふるに、その特色は教理の論争や、本尊異同の論議を闘はずに非ずして、剛健質實なる武士を信者とせる禪宗の獨占舞臺は、武士の治心術を教ふるの一

點に在り。之を座禪觀念の工夫と稱す。而も溯りて之を考ふるに、座禪觀念の工夫たる治心術は畢竟我國太古より存せし鎮魂の儀を一層精練して、印度風の色彩を加味せし者に外ならざるものとす。こゝにも我國の思想と佛教思想との夙に握手せる有様を見る可し。斯く禪宗の力説する所は這種の攝心法、治心術に在り。然ればその本尊の如きに至りては、釋迦可なり、達磨可なり、乃至牛糞馬尿亦可なりとす。そは畢竟南無乾屎橛なり。果して然らば日本固有の神々を本尊とせる固よりその拒まざる所なり、何となれば斯くの如きは禪宗の立場よりせば、畢竟月を指す指に外ならざればなり。教外別傳不立文字の佛心宗は、何ぞ本尊を云々するの戲論を圖はさんや。故に松島の瑞巖禪寺の本尊は、釋迦又は阿彌陀に非ずして、仙臺の藩祖伊達政宗甲冑の俗形なり。祖元禪師の來朝するや、先づ加茂八幡の諸神に順風を祈り、その

鎌倉に住するや、遙に熊野の神祠に、支那將來の異香を贈り、燒きて以て熊野權現を供養せんことを請へりと謂ふ*。是れ禪宗と從來の日本思

* 八幡宮祈風

風はして寒潮にむつ打頭を速宵祀下覺を遲留を聖君速轉西南信風翼翻々送客舟を

加茂廟祈風

佛道如今已向東王臣命我振支宗勿忘當日靈山囑惠我西南一掉風

寄香燒獻熊野大權現

先生採りて藥未曾回故國關河幾度埃今日一香聊遠寄老僧又爲送秦來佛光國

師語錄、大日本佛教全書、一九六及び一九七

想との調和なり。矧や禪宗に在りてはその祝聖上堂の儀式に於て、先づ聖壽の無彊を祝禱し奉るに於てをや。我國の禪宗が依然國家中心主義にして、我國情に契合一致せるものあるを見る可きに非ずや。

鎌倉時代は日本我的自覺旺盛を致したる時なり、日本民族の思想上

の獨立全く成りし時なり。この傾向は又神道界にも反響して、伊勢外宮派の神道となり、降りて卜部家の唯一神道となりて現はるゝに至りたるものとす。蓋し卜部家の神道は佛儒を十分に咀嚼玩味して、之を自家藥籠中のものと爲し、以て一家獨立の神道説を大成し、神本佛跡の本地垂跡説を玉成せり。卜部家の神道説を述べたる唯一神道名法要集に曰く、

顯密二儀者、顯露之顯、以佛爲本地、以神爲垂跡、隱幽之密、以神爲本地、以佛爲垂跡、顯露之顯者、淺略義、隱幽之密者、深祕義也、今以佛爲本地者、是淺略一義也、(群書類從、三、六五〇)

是れ明かに佛教を藉りて神道を潤飾し、而も此事實を匿くして、神道を中心とせる神道神學説の獨立大成を告げしものに非ずして何ぞ。

神道は實に國民的宗教にして、他國民の中に表はれたる國民的宗教

猶太の及ぶ
大詞の及ぶ
印度の及ぶ
輪聖の及ぶ
日本と轉び
皇天と

に見るを得ざる一種の特色を發揮し、倫理期に於ける宗教として、麗はしき發展を成せり、而てこは主として、今日に永續せし大日本帝國てふ金甌無缺の國家の二千有餘年來、存在せしが致す所なることを明かにし、而て神道は國民的宗教にして、而も神人同格教なるが故に、天皇に明津神を拜して、皇位即神位なることの信仰の下に、萬世一系の皇室の基礎、此に確立せるものなり。故に若し印度に於て、その世界的宗教中に靈界の救主釋迦を産せしを以て、その誇となし、猶太に於ても、等しくその國民的宗教を一轉して、耶蘇てふ世界的靈的救主を産出せしをその誇とせば、日本に於ては、萬世一系の皇位即神位を履み給へる歴代の聖天子を奉戴せることを以て、その誇とするに足るものとす。猶太に於ても、永く政治上の救主たる彌尸訶 Mesias の出現を希望する信仰あり、而もそは全く空頼となりて之を實現するの期を得ず、再びダビデ、サ

ロモ二王の治世の如きものを見るを得ず、その國勢陵夷して遂に羅馬の附庸となり、此に猶太の國家は滅亡せり。此に於てか耶蘇は志を國家の方面に斷ち、政治上國家の主權は、之を羅馬皇帝に歸し、以て自ら靈界の教主を以て任ずるに至れり。是れ基督教の世界的宗教たる月桂冠を得たる所以にして、是れ蓋し從來の如く、政治上に猶太人の旦暮翹望せし理想的君主たる彌尸訶を出すこと能はざるに至りし國狀に鑑みて、その問題は精神界の彌尸訶に向ひて轉進し來り、此に基督教てふ世界的宗教の靈的教主耶蘇を出すに至りしも、政治上の彌尸訶は遂に出でずして止みたり。又印度に於ても、猶太の彌尸訶に比す可き理想的君主たる轉輪聖王Cakravartiniaの思想あり、現に釋迦の如き、その降誕するや、仙人あり之を相して曰く、此兒若し長じて國家に長たらば、當に轉輪聖王となる可く、若し出家して靈界に活躍せば、三界の大導師と爲

る可しと。釋迦は前者を採らずして後者に出で、耶蘇と同じく國民的宗教の圏外に穎脱して、世界的宗教の開祖となり、以て印度の精神界に佛教てふ一大特産を寄與せり。故に耶蘇と云ひ釋迦と云ひ、共にその生土に本來存せし政治上の理想的君主の希望に添はずして、俗界より靈界に轉進し行き、こゝに又各自の特色を發揮せしことは、上述の如し。然るに日本と印度と猶太とは各國情を異にし、日本は萬國に冠絶して、その國礎の鞏固なるものあり、猶太人の如く亡國の民に非ず、又印度の如く王家の榮枯盛衰常ならざるが如きものに非ずして、萬世一系の皇室長へに上に在して、恰も泰山北斗の如く、終始變はること無く、萬古に奉戴せる天皇は、眞に猶太人の久しく翹望して而も遂にその實現を見ざりし理想的國君たる彌尸訶若くは印度人の理想的君主たる轉輪聖王の出現を、日東の天に見るが如き位置に在するものなり。故に此點よ

り之を考ふるも印度思想猶太思想と相對して、我が國民思想の之れと全く相匹敵せる特種性を想見す可きなり。古人亦夙に此思想に到達せり。故に古より我天皇を呼び奉るに、轉輪聖王即ち金輪聖主なる語を以てせしもの少からず。前中書王兼明親王は村上天皇を以て轉輪聖王に擬せり。曰く、

金輪聖主、堯雲遍壽、潤藥草於春畝、舜日重照、轉法輪於昏衢(本朝文粹、一三、九)

*同書、一六を比較せよ

陸中平泉の中尊寺の所藏に係る藤原清衡の願文は、崇徳天皇に轉輪聖王を拜せり。故に曰く、

金輪聖主、玉宸無動

△二王の出世は天然に限也、二王とは法王と轉輪聖王と也……然土は國廣く

……往昔人壽無量歲也、時に王あり善住と名く頂上に肉胞生ず……十月満て開けて端正の童子を生ず、頂生と名く……頂生……沐浴精進すれば金輪寶乃至象寶馬寶美女寶珠主藏の臣、主兵の臣、自然にして出、千子具足す、思はく閻浮提は皆我に屬す……と飛行の車に乗件の士寶諸共に馳飛、三洲の人輪王の來現快とて隨上る……初利天に上る、帝釋……出迎ひ手を執りて善法堂に昇しむ、座を分ちて座す、堂の耀く故に帝釋と頂生と貌ひとし唯まじろぐのみ別也……(琉球神道紀、二、九)

尙ほ長阿含經、一八、轉輪聖王品、(灰、九、九六—九八)及び雜譬喻經、(暑、七、八)佛說受新歲經、(宿、八、二六)參照

と。

神道は國民的宗教なり、而も儒佛の長所を攝取して、倫理的智的にその發達を遂げたることは、既に述べたるが如し。而も、佛教の如きは世界的宗教の一大霸王なるを以て、之れと永年宗教界に驅逐せし結果、四海同胞一視同仁の思想は、夙に神道中に涵養せられて、神道は極めて寛

容的なるものとなれり。特に明治天皇は左の御製に由りて、四海同胞の大義博愛慈悲の大御心を述べ給へり。曰く、

四の海皆なはらからと思ふ世に

など波風の立ちさわぐらむ

國の爲仇なす仇はくだくとも

いつくしむ可き事な忘れそ

と。亞米利加の大統領ルーズベルトが、如上明治聖帝の御製の英譯を誦して、之に感激し、以て日露講和の中介者を以て自ら起つに至りしと傳ふ。佛教は慈悲を説き、基督教は博愛を主張し、儒教は仁を教ふ。之れと相對して、倫理期に入れる神道は、正直若くは至誠を力説し、之を以てその根本原理とせり。故に奈良朝に在りては、臣下の以て上に事ふ可き忠實なる奉公の精神を、清明正直の心と説き、或は又淨明心正直言

倫理教の根
に於ける
神道の正
本義の至
誠即ち直

と呼べり。

*續日本紀、九、系、二、一四七

*同上、五三三

更に舊き時代に溯りて之を云へば、之は黒き心に對せる赤き心等の言葉に淵源するものと謂ふ可し。

*日本書紀、一、系、一、二、四

故に曰く、

清淨者上古今日一貫之神教、只是正直無妄之謂也、諸法萬行之源、在心地、此云清淨也（六根清淨拔錄）

故に貝原益軒は曰く、

神明は眞實、無妄、慈愛、正直、聰明、清潔の徳有、若し人心を清く正しくして、誠の心を以て祈らば、などか感通なからんや（神祇訓、全集、三、六四九）

神は正直の頭にやどり給ふ。夫れ神道は誠を本とす、心も行も偽なかる可し(同上、六六七)

と。僧雲映はその神道故事備忘録に於て記して曰く、

夫惟神道一箇赤心也、赤心者何、卽是本具真心、本覺也。

と。雲映は又入門十二通聞書に於て述べて曰く、

此神道を一言にて云へば唯一箇の赤心也、赤心にして臣民を撫育するは君の道なり、赤心にして君に仕ふるは臣の道なり、赤心にして親に仕るは子の道なり、稜して赤心に歸するは稜の法なり、天下の人をしてこの赤心に歸……は國治り家齊ひ身治り心清淨にして無爲に住す是れ眞の神道なり、一箇の赤心卽是神道也。

と。兼明親王曰く、

云、神云、鬼無親無疎……恭敬是亨、至誠以祈之、豈不欽饗哉(本朝文粹、

倭姫命世記に又曰く、

神垂以祈禱爲先、冥加以正直爲本利……日月廻四洲、雖照六合、須照正直頂止(神道五部書、系、七、四九六)

と。靈元天皇の御製に曰く、

守れなほ神の宮居にひくしめの

すぐなれと世をいのる誠は

神垣に守るもさそなる心

すぐなれと世を祈る誠は(歴代御製集、六、二一九)

と。此點に至れば、基督教と云ひ佛教と云ひ、將又神道と云ひ、是等は畢竟一に歸するものにして、唯その相違は、同一眞理を表出する言語文字の異同と、その力説する方面の異同に歸して止むものとす。實に宗教

學は、一切の宗教を以て、皆な夫々相當の眞理を包有するものにして、一切の宗教は各自互に能く他の云ふ所を理會せば、世人の想像する如く相矛盾するものに非ずと考ふるものなり。故に人にして神性の現はるゝものは、必ずしもナザレの耶蘇にのみ限ると考ふる能はざるものなり。神性は釋迦にも現はれ、ザラツシュエトラにも現はれ、一切宗教の開祖にその顯現を許容す。耶蘇を以て神の子とするに反して、モハメッドを惡魔の子の如く云ひ做せるは、過去基督教徒の偏見に屬し、今日の基督教徒は得て與り知らざる所なり。今日誰れか是くの如く頑迷固陋の説を爲すものあらんや。果して然らば清麿、楠公、乃木大將等、何れも人にして而もその崇高なる倫理的、理想の體化たる、日本人は遂にこの二三子に神性を認めざるを得ざるなり、此に於てか護王神社創り、湊川神社成り、乃木神社起り來るに至るものなり。唯耶蘇、釋迦、モハ

メッドの如きは、世界的宗教の開祖にして、その教祖の人格は、個々の國民性を帶びざるも、我國の神社及びその祭神に至りては、元來神道が國民的宗教なるを以て、そが著しく日本民族性を露はし、其倫理期の神社は、多くは我國家に勳功ある英雄偉人を以て祭神と爲せるの差異あるのみ。而もその人間の中に神性を認むるの點に至りては、佛基二教等の信仰意識と、寸毫も異なること無きものとす。斯く達觀し來れば清麿、楠公、乃木大將等、誠心誠意君王に靖獻し、國家の爲めに一身を犠牲とせる所の献身没我の偉大なる清き精神の體化たる英雄偉人に、神性を發見して、之を崇拜することを以て不可なりとせば、耶蘇にこの神性を認むること、又等しく不可なるに至る可きなり。一切の宗教に對して、一視同仁の態度に出づる宗教學者は、基督教徒が耶蘇に神の子の光を見ると同じく、一切宗教の崇拜對象に神的の靈光を見んと欲するものな

り。ユニテリアン一派の基督教徒は或は云はん、我等は耶蘇に神性を認めず、唯靈界の一偉人として之を仰ぐのみ、そは尙支那人が孔子を聖人として尊敬するに異らずと。是れ又可なり。蓋し耶蘇亦ナザレ人にして、元來工匠の子、之を人として見んか、孔夫子の如く、之を聖人の位置に措きて考察すること、固より可なり。ユニテリアンは此立脚地より教主耶蘇を見て、神の唯一性を力説するものなり。然れども之れと同時に、耶蘇を以て神が肉をとりて現はれ、ロゴスの體化 *Incarnation of Logos* なりとも考ふるを得可し。而もこは獨り耶蘇一人にのみ限るに非ず、一切他の宗教の教主に取ても、同様の考察を施すを得可きもの、此點や懸て哲學意識と宗教意識との相岐るゝ所にして、哲學的意識は理論と抽象とを以て甘んじ、之に反して宗教的意識は彼の具體と象徴 *Symbol* とを好み、此異同は宗教がその教主開祖等に神性の靈光一閃を

見んと欲する所以なり。ユニテリアンは哲學上の理論に長ずと雖も、遂に宗教としての實勢力に乏しきに了はれるは、元來少數なる哲學者風の意識の満足をのみ得ることに努め、社會民衆の大多數を占むる宗教的意識の特色を顧みざるの致す所にして、宗教的意識の特色が抽象的真理の具體化象徴化に在りとせば、基督教がその教主耶蘇に神性を認め、佛教がその教主釋迦に佛性即神格を把持し、神道がその崇拜の中心となれる英雄偉人等に神性を見んとする、固よりその所なりと謂はざる可からざるなり。之れを是れ悟らずして、自己宗教の教主にのみ神性を認むることを知りて他の宗教にそを峻拒せんとするが如き者あらんか、余輩宗教學者は、又實にその理由を解する能はざるものとす。彼の天文年間に一度 *Zavier* に由りて、我國に輸入されたる基督教が、大迫害を蒙りたるも、その原因は他の宗教の領解を全く缺きて、

唯一神教的不寛容の態度に出でしに由るものと謂はざる可からざるなり*。今やザビエー渡來の時期とは、大に時代の精神を異にす、此新し

* 此當時、基督教徒の時代精神の極端なるものを反映せるものをクラッセ Christ氏の左の言なりとす。氏曰く、

信長は自ら神と誇稱し其臣下の崇敬を受くれども、暫時にして死を致せり、信長は佛像を破却し基督教徒を恵み上帝に勤勞を盡しければ其賞として上帝は彼の死に至る迄は充分の幸福を授けたり、然れども信長其固有の分限を忘れ己を敬拜せしめんと欲したるを以て上帝は天威を輝し之を誅するなり、抑天に獨一の上帝ありて各王を總制し……驕恣なる者を裁し之を衆民に知らしむ、然れば則信長は現世の地獄より未來の地獄に送られたるなり(太政官譯、日本西教史、上、九八五)

き時代精神を以て、基督教徒も亦我國既往の精神文明を研究し、以てその十分なる理解に到達せば、内外彼我の間大に意志の疏通を得て、宗教

界に於ける思想上の四海同胞主義の下に、佛教と云はず、基督教と云はず、將又神道と云はず、一堂の中に集り、笑ひてその握手を交換す可きの期ある可しと信ず。今日或一派の論者は、神道の宗教的性質を毫末も顧慮せず、又神道に過去、現在及び將來に於ける生氣の存するものあるは、一にその宗教的に熱烈なる至情に在りて存し、天皇に神性を拜し、信仰的白熱の状態に在る、忠孝の精神を以て君王に靖獻し、一意國家に奉ずるに在る、所以を悟らず、全然その精華神髓を捨て去り、唯その形式的なる道德方面のみを説きて足れりと爲し、その結果神社は西洋の記念碑銅像と擇ぶ所なしと公言して憚らず、事實を曲解し神道の歴史を無視して、而も自ら以てその説明の肯綮に衷せりと爲す、思はざるの甚しきものに非ずや。斯かる立脚地の缺陷は、延きて現下の國民教育に於ける德育問題にも影響し、國民道德の不振、我が修身教育の不徹底てふ

ことに終はらんとす。是れ實に識者の憂慮措く能はざる所なり。神道に重大なる宗教的要素を拒否して、全然之を道德の範圍にのみ措かんとする者の意に惟へらく、斯の如きは神道をして、佛基二教てふ宗教界の霸王より、神道の鼎の輕重を問はしめざる最良手段なり、斯くして神道の我思想界に於ける位置は永遠に安全なりと。こは曾て獨逸の先哲カントが、基督教の當時の哲學より受くる批評を避けて、その位置の安全を計り、以て信仰を擁護せんと企て、基督教を知識の範圍より救ひ出し、宗教を以て道德上の事項と説き、隨ひて知識の上よりは、寸毫も批評を試みる能はざるものなりとなし、之を以て基督教の爲めに計りて、忠ならんとせり。此動機を以て、カントは人心に純粹理性 *Reine Vernunft* と實踐理性 *Praktische Vernunft* の分別を試み、その結果現象界と本體界の峻別となり、その認識論は一大真理を包有すると同時に、破綻破

綻又破綻、終に收拾す可からざる認識論上の誤謬を犯して迄も、之を決行せり。今や我國一部の人士は、神道の發達史を無視し、神社の事實を曲解して、以て神道を宗教の範圍より切り放して、獨り之を道德の圈内に檢束せんとせり。而も事實は有辯なる證人にして、斯くの如き無理なる計劃は、當然諸種の破綻を生じ、斯かる主義の下に行はるゝ國民道德は、不振の聲益高く、實效の、その教育的勞力に伴はざるもの多く、畢竟不徹底不成功に終はらんとす。天下具眼の士今や此に見るあり、斯問題を捉へ來りて、根本的にして徹底的なる研究を試み、神道に一時を糊塗せる御都合主義的解釋を施すを許さず、事實を基礎とし、根柢ある研究を神道に試み、以てその結果を國民道德の實際に應用し來らんとするに至れり。是れ真に今日の學界に於ける慶賀す可き眞摯の風潮にして、余がこの小研究が、是等人士の參考となるを得ば、本著も亦當に

我が學海に涓滴の功を致せるものと謂ふを得可き乎。

第六章 明治天皇の御製より拜讀

したる敬神の大御心

神の全知——吠陀經に現はれたるヴルナ神の全知——イスラエルの預言者とヤーエーの全知——同々教のアルラーの全知——佛陀の一切種知——慈山大師と阿含經——明治天皇の御製と昭憲皇太后の御歌——貝原益軒——千金翼方——抱朴子——神の全能性と遍一切處及び神の攝理——明治天皇御製——本居宣長——アイズムとシイズム——至誠祭神——預言者ホセアと保羅——神道五部書——明治天皇御製——「目に見えぬ神の心」——黒住宗忠の「誠の中に住める生き者」——耶蘇の「心の清き者」——公禱としての祈——私禱に関する黒住宗忠の諷刺——乃木大將の信神——吉田松陰と西郷隆盛——自己に對する修養の御教——明治天皇御製——他に對する道德の御教としての御製——博愛平等怨親一如——再び接神の御製（至誠）——理想界と現實界——松陰七生の説——古今を一貫せる敬信の本義——明治天皇御製——歸結——明治天皇御製

明治天皇の御製は其數頗る多き由、漏れ承はる所にして、天皇が曠世の英主に在すと同時に、歌聖に在しませることも亦國民の等しく周知せる所なり。今余は本章に於て、斯かる聖帝の數多き御製中、聖帝敬神の大御心を拜戴し得可きもの二三を抄出して、余が專攻せる宗教學の上より之を拜讀するの光榮に浴せんとす。

宗教思想の幼稚なるや、その神の觀念亦低級にして、その神は有限相對不完全なること吾人々間と大差無し、彼の自然的宗教の時代に表はれたる神話的宗教の神々は、多く這種のものに屬す。然るに人知漸く進み、道德觀念亦次第に向上し來るや、此に從來相對的なりし神は絕對的となり、その有限性は漸く無限性を帯び來り、以て至完至全の神の觀念に到達するに至るものとす。人知進歩の此階段に於ては、此に神の全知 Omniscience てふ特性は著しく力説せらるゝに至る。今這種の思

神の全知

吠陀經に於ては、神の全知

イスラエルの預言者イザヤの言

想の文獻上頗る早く表はれしもの、一を印度最古の宗教思想を今日に傳ふる吠陀經となす。曰く、

人は密に爲すと思ふとも、諸天は之れを知る。兩人相會し秘密に事をたくらむと思ふとも、ワルナ Varuna の神は第三者として之を知る。縱令身は天外に遁逃し去ると雖も、人はワルナの神の監視を免るゝこと能はず。

ワルナは盡天盡地、一切の事物を知る、人の瞬の數をも知り給ふ。と。イスラエルの預言者イザヤ Isaiah 亦之れと同様の信仰に住し、而もそを一層明晰に敘述せり。曰く、

汝等眼を擧げて高を見よ、誰れか此等のものを創造せしやを思へ、主は數を調べてその萬象を引き出し、おのゝその名を呼び給ふ。主のいきはひ大なり、その力の強きがゆゑに一も缺くること無し。

ヤコブよ汝何故にわが途はエホバに隠れたりと云ふや、イスラエルよ汝何故に我が詛は神の前をすぎされりと語るや。

汝知らざるか聞かざるか、エホバはとしへの神、地のはての創造者にして倦み給ふこと無く、また疲れたまふこと無くそのさときこと測りがたし(イザヤ。四〇、二六—二八)

ヨブ又曰く、

神は大なるものにしまして我れ等彼を知りたてまつらず、その御年の數も計り知る可からず、全能者は我等測りきはむることを得ず(ヨブ。二七、二三)

と。こは實にイスラエルの神ヤーエー(エホバ)がその全知の性を以てして、以て濱の眞砂も管ならざる天上無數の星辰をも能くその數を周知し、管に是れのみならずその星辰の名稱を一々熟知せるものと爲す、是れ豈に神の全知なることを謳歌せるものに非ずして何ぞ。そは尙

印度の詩人がワルナの神を以て人間の目ばたきの數をも知る者と爲せる比喩的言辭を以て、その神の全知を讃誦せると同一轍に出づるものなり。紀元前第七世紀のイスラエルの預言者エレミヤ *Jeremiah* 亦神に關する同様の思想を述べて曰く、

エホバ云ひ給ふ人我れに見られざる様に、密かなる所に身を隠くし得るか、エホバ云ひ給ふ、我は天地に充つるに非ずや(エレミヤ。二三、二四)

イザヤ又曰く、

己が謀をエホバに隠さんとする者は禍哉。暗中に在りて事を行ひて云ふ、誰か我を見んや誰か我を知らんやと、汝は曲れり(イザヤ。二九、一五)

と。回々教はその神アルラー Allah の全知を教へて曰く、

アルラーは海にも陸にも起これる一切の事物を知る、木々の一葉もアルラーの之れを知らずして落つるもの無し、常に生き通しなるアルラーの神は絶えて眠ること無く、又眠に襲はるゝことも無し(同經聖典ケルアン)

と。 慈山大師は又一切種知 *Sarvajña* 者たる佛にこの全知の性を認め
て曰く、

信乎佛之知見、閻浮提雨皆知、滴數現前、松直棘曲、鵠白鳥玄、皆了元因。
と。 佛が此世に降り來る雨の滴數をも知悉し、何が故に松樹亭々として雲漢を摩し、荆棘透曲地上を這ひ、鵠鳥は白く、鴉鳥は黒きか、佛は是等の事項に就きて一々其元因を了知すと云ふに至りては、是れ恰もヤーエーの神が天に輝ける無數の星辰の數と名稱とを悉知し、ヴルナの神が人間の瞬の數をも能く熟知すと謂へるものと相對して、神佛に全知

の性を認めしものと解せざる可からざるなり。 原始佛教の聖典たる
増壹阿含經は此意を述べて曰く、

彼如來爲明爲光、亦無疑滯、知三世事、靡不貫博。是時阿闍世王、聞者
婆伽、語已、歡喜踊躍、善心生焉(三九)

と。 今斯かる立脚地より明治天皇の御製を拜讀するに、亦之れと同様に
神の全知を教示し給へる迹あるを見る、曰く、

曇り無き人の心は千早振

神はさやかに照し見るらむ

と。 昭憲皇太后の御歌に曰く、

獨りのみ思ふ心のよしあしも

照し分くらむ天地の神

と。 是れ豈に貝原益軒の所謂

平生心曲有誰知、常畏天威、欲勿欺、

と訓へたるものと同様の御心に非ずして何ぞ。千金翼方が老子の語として載するを見るに曰く、

勿謂闇昧、神見我形、勿謂小語、鬼聞我聲……故天不欺人、示之以影、地不欺人、示之以響、

抱朴子

と。而て是れ實に抱朴子の所謂、

人自不能聞見神明、而神明聞見已之甚易也

に外ならざるなり。斯く無形に見、無聲に聞く神明の信仰を有す、是れ豈に人生の一大重要事に非ずや、君子は屋漏に恥ぢざる底の道德も亦此に淵源するものあるを知らざる可からず。

明治天皇の御製に又曰く、

千早振神ぞ知るらむ民のため

神の全能
性通及遍
切處及び
攝理の一

世を安すかれと思ふ心は

と。神の全知は懽がて又神の遍一切處 Omnipresence の思想ともなり、又その全能 Omnipotence の思想ともなり、亦神の世界攝理 Providence の信仰とも關聯して表はれ來るに至るものなり。而てこは既に引用せし前諸家の見解中にも散見せるものあるを以て今更に一々之を各宗教に就きて例舉せず、以て直ちに御製の上に於てその間の消息を拜戴せん。明治天皇の御製に曰く、

我が心およばぬ國のはてまでも

よる晝神はまもりますらひ

と。是れ宗教學上より之を考察せば、明かに神の遍一切處と全能の思想を訓へ給へるものに外ならざるなり。

更に神の攝理の此世に及べるを詠み給へるものに曰く、

明治聖帝
御製

預言者ホセアと保羅

り。イスラエルの預言者ホセアが、

神は愛情を喜びて犠牲を悦ばず——Not Sacrifice but mercy(ホセア。六、六)と叫び、耶蘇の弟子保羅が、

その身を神の意に適ふまよ聖く活ける祭物まつものとなして神に獻げよ、是れ當然の祭なり(羅馬書。一二、一)

と教へ、我が神道五部書記者が、

神道五部書

神明は饗は徳と與を信、不求備物焉(御鎮座本紀、系、七、四五七)

と云へるも、皆な等しく宗教意識の倫理化せる時代の産物にして、倫理的宗教の至醇なるものを現はすものとす。故に明治天皇の御製に曰く、

明治天皇御製
目に見えぬ神の心

目に見えぬ神の心に通ふこそ

人のこゝろの誠なりけれ

黒住宗忠の誠の中に生き

耶蘇の清き心

と。實に人が聲も無く臭も無き無形の神明に接觸し得る所以は、一に吾人々類の誠心誠意に外ならず、至誠神に通ずとは蓋し是れの謂なり。斯かる神に參見する所以のものは、顯微鏡を以てするも之を能くするを得ず、望遠鏡を以てするも果す能はず、將又潛望鏡の力又之を能くす可からざるものなり。唯獨り之を能くするを得る所のものは一に人心の誠に在りて存するものとす。こは全く至誠の力のみ能く之をして之に至らしむるものなり。何となれば黒住宗忠の教へし如く、

神といひ佛といふも世の中の

誠の中に住める生きもの

に外ならざればなり。耶蘇亦此意を述べて曰く、

心の清き者は幸なり、その人は神を見ることを得可きが故に(馬

太傳。五、八)

と。蓋し見神の實驗と云ふも、清き心即ち至誠の心を以てしてのみ能く之を成遂し得可ければなり。如上明治天皇の御製一首亦此意を以て謹解し奉る可きものとす。實に明治の聖帝は斯かる敬虔なる大御心の下に神人同交の實意識を體驗し給へるものとす。此に於てか斯かる接神の大御心は又直に眞摯にして公正なる祈禱の形式を採り、私禱に非ずして公禱として、國家人民の福利、社會民衆の安寧幸福のみを神に祈願し給ふに至る、而て此にも亦聖帝が神人同交の御實驗に住し給へるを見る。曰く、

公禱として
の祈

あさな／＼御祖の神に祈る哉

我國民をまもりたまへと

とこしへに民やすかれと祈るなる

我代をまもれ伊勢の大神

私禱に關
する黒住
宗忠の諷
刺

這種の祈禱は彼の低級の宗教意識の產物たる、苦しい時の神だのみ即ち *Not lehr Beten* と云ふが如き祈禱と全然趣を異にせるものなり。黒住宗忠は斯る低級の祈禱を排斥して、

身のつらき時には神が戀しくて

たすけられては神はそちよれ(それでは天が許し給

はず)

と諷刺し去れり。

既に斯かる交神の意識あり、此に於てか乃木大將の所謂、

國の爲め力の限り盡さん

身のゆく末は神のまに／＼

との大安心立命ともなりて表はれ來るに至るものとす。古歌に、

後の世もこの世も神にまかするや

乃木大將
の信神

吉田松陰
と西郷隆盛

と云へるも亦同一思想に出づるものにして、その結果は吉田松陰が、
我今爲國死、死に負ふ君親、悠悠々々天地事、鑒照在明神、
と云ひ、西郷隆盛が、

生死何疑天、附與願留魂魄、護皇城、

てふ一大安立の位置に立つことをも得るに至るものとす。

西郷隆盛の所謂人を相手とせず天を相手とせよと云へる位置に到達し、接神の意識に住して始めて能く或は自己に對し或は社會に對して道徳上の修養を玉成するを得るに至るものなり。而て明治聖帝は如上敬虔なる接神の御意識上より、自己に對する修養の徳を教へ給ひて曰く、

何事も思ふがまゝにならざるが

自己に對する修養
の御教
明治天皇
御製

かへりて人の身のためこそ

善し悪しを人の上には云ひながら

身を省みる人なかりけり

天をうらみ人を咎むる事もあらじ

我が過をおもひかへさば

思ふにはまかせずとも人心

たひらかにこそあらまほしけれ

家富みてあかぬことなき身なりとも

人のつとめをおこたるなゆめ

おのがじしつとめを終へて後にこそ

花の蔭にはたつべかりけれ

と。昭憲皇太后亦此大御心を體せられて、教へたまはく、

花の春紅葉の秋の杯も

ほどくゝにこそ汲まゝほしけれ

と。明治天皇が三伏金を鑠かすの候、或は朔風肌を劈くの時、彼の延喜の帝が寒夜に御衣を脱して民間の凍餒を御忍びあらせられし如く、明治聖帝は一意専心下人民を御軫念あらせられて、

賤が住むわら屋のさまを見てぞ思ふ

雨かぜあらし時はいかにと

暑しとも云はれざりけりにえかへる

水田に立てるしづを思へば

冬ふかきねやのふすまをかさねても

思ふは賤が夜さむなりけり

桐火桶かきなでながら思ふ哉

すきまおほかる賤が伏屋を

いくさ人いかなる野邊にあかすらむ

蚊の聲しげくなれるこの夜を

と詔らせ給ふに至りては聖意長くも尊し、吾人臣民たる者豈に聖徳の無窮に感泣せざるあらんや。又曰く、

この春は梅鶯も忘れけり

民やすかれと思ふばかりに

政事出でて聞くまはかくばかり

あつき日なりと思はざりしを

としくゝに思ひやれども山水を

汲みて遊ばむ夏なかりけり

夏の夜もねざめ勝にぞ明かしける

世のため思ふこと多くして

古の文よむたびに思ふかな

おのが治むる國はいかにと

照るにつけ曇るにつけて思ふ哉

わが民草の上はいかにと

嗚呼こゝにも聖帝の偉大なる民本主義の大御心の發露を拜す可き
に非ずや。

接神の大御心に基せる自己に對する修養の御教は又他に對する場
合に於ては博愛平等怨親一如の實踐となりて、現はるゝを見る。故に
明治天皇の御製に曰く、

千萬の民とともに楽しむに

ます樂はあらじとぞ思ふ

他に對す
る徳の
御教とし
て御製

博愛平等
怨親一如

四方の海みな同胞と思ふ世に

など波風の立ちさわぐらむ

國のため仇なす仇はくわくとも

いつくしむべき事な忘れそ

と。斯かる平和主義、平等主義、世界主義の由りて來る所果して那邊に
存在するか。曰く他無し、後柏原天皇の御製に見ゆる如く、こは元來、

神はその人に上つ瀬下つ瀬の

みそぎも同じ波にうくらむ(歴代御製集、四)

てふ神觀の平等主義に基づくものならずんば非ざるなり。

今此明治聖帝の大御心を體して、日露戰役の際彼の上村大將は日本
海の海戰後露兵の風波に溺れて、將に海中の藻屑と消え失せんとする
ものあるを悉皆救助せり。亞米利加の前大統領ルーズベルト氏は明

治聖帝の此御製に感奮して、自ら進みて日露平和の仲裁にあづかれり、こは一に皆な是れ明治天皇聖徳の然らしめたる所のものにして眞に至誠神に通じ至誠人を動かすものありしを知るに足る。明治天皇の御製に曰く、

鬼神も泣かすものは世の中の

ひとのこゝろの誠なりけり

千萬の民の心も治まらむ

誠ひとつをもてをしへなば

人はたゞ誠の道を守らなむ

たかきいやしきしなはありとも

千早振神の心になふらむ

我が國民のつくす誠は

再び接神
の御製
(一至誠)

眼に見えぬ神に向ひて恥ぢざるは

ひとのこゝろの誠なりけり

と。

余を以て之を見る、如上論明せし接神の意識は現代に漸く枯死せんとして、而かも人生百般の行爲に必須缺く可からざる活ける泉の本源なり、斯かる対象や又之を稱して神と云ひ佛と云ひ天と呼ぶ、その名稱稱呼の如き深く問ふを要せざるもの、既に云へる如く松陰南洲又此種信仰あり、以て彼れが如き人格の玉成を見、維新の大業に参加する原動力を形成し得たるものとす。松陰のものせし有名なる七生説の如き明に此消息を洩せるもの、蓋し松陰の七生説に惟へらく、余や彼の湊川を過ぎ楠公の墓前に詣で涕淚滂沱たるを覺えざる者あり、又明の亡命の徒たる朱舜水亦楠公の墳墓を吊ひて、暗涙襟を霑すものありしと云

理想界と
現實界と

ふ。その故何ぞや、松陰と楠公とはその時と所とを異にし、舜水亦楠公と未曾て全く相識らざるの徒なり。而し松陰舜水相共に楠公の墓前に啼泣嗚咽せる原因は果していづくに在りや。松陰は之を説明するに儒教哲學に由り理と氣の二大原理を以てし、松陰舜水楠公の三子者各其氣即ち現象差別の相より之を云へば全く相關せざる者の如くなるも、一たびその本體絶對の世界に立ち還りて之を考察せんか、互に一理の相貫通するものありて存し、隨ひて楠公の誠忠は又彼れ等二子の誠忠と相感發して、此に時と所を異にせる彼等兩人の者をして楠公の流風餘韻を想望せしめ、その墓前に泣かしめたるもの、斯くして楠公に代はりて更に新なる幾多の楠公を輩出し來るに至るものなれば楠公一たび死して而して後ち生れ來ることその數勝て計る可からず、そは嘗に七生のみならざる所以を痛論せり。其文に曰く、

松陰の七生説

七生説

天之茫茫、有一理存焉、父子祖孫之綿綿、有一氣屬焉、人之生也、資斯理以爲心、稟斯氣以爲體、體私也、心公也、役私殉公者爲大人、役公殉私者爲小人、故小人者、體滅氣竭、則腐爛潰敗、不可復收矣、君子者、心與理通、體滅氣竭、而理獨亘古今、窮天壤、未嘗暫歇也、余聞贈正三位楠公之死也、顧其弟正季曰、死而何爲、曰、願七生人間、以滅國賊、公欣然曰、先獲吾心、耦刺而逝、噫、是有深見于理氣之際也、歟、當此時、正行正朝諸子、則理氣並屬者也、新田菊池諸族、氣離而理通者也、由是言之、楠公兄弟、不徒七生、初未嘗死也、自是其後、忠孝節義之人、無不觀乎楠公而興起者焉、則楠公之後、復生楠公者、固不可計數也、何獨七而已哉、余曾東游三經、湊川拜楠公墓、涕淚不禁、及觀其碑陰、勒明徵士朱生之文、則復下淚、噫、余於楠公、非有骨肉父子之恩、非有師友交遊之親、不自知其淚之所由

也、至_{りて}朱_{はに}生_に、則_ち海_を外_を之_を人_を反_て悲_む楠_公、而_も吾_も亦_も悲_む朱_生、最_も無_謂也、退_て而_も得_る理_氣之_を說_ふ、乃_も知_る楠_公朱_生、及_ち余_も不_肖、皆_も資_ぶ斯_理、以_て爲_す心_を、則_ち雖_も氣_を不_屬、而_も心_を則_ち通_ず矣、是_を淚_の所_を以_て不_禁也、余_も不_肖存_し聖_賢之_を心_を、立_て忠_孝之_を志_を、以_て張_る國_威、滅_す海_賊、妄_を爲_す己_に任_じ、一_と跌_つ再_と跌_つ爲_す不_忠不_孝之_を人_を、無_し復_す面_目、見_る世_人、然_る斯_心已_に與_ふ楠_公諸_人、同_す斯_理、安_を得_る隨_ひ氣_體、而_も腐_爛潰_敗、哉_や、必_ず也、使_{して}後_之人_を亦_も觀_る乎_余、而_も興_起至_{りて}于_に七_生、而_も後_爲可_し耳_矣、噫_は、是_を在_る我_に也、作_る七_生說_を。

今此松陰七生說の根柢となれるものは、宋儒の所謂理氣の觀念なり、換言せば現象の裏に潛める本體の思想なり、目に見える事相の根柢となれる絶對の思想なり、儒家又之を天と云ひ上帝と稱す、我國古來より之を神と呼び佛教之を佛と稱せり。松陰は一たび此現象以上に超越し相對差別の事相以上に卓立せる本體たり絶對たる平等の眞實界を憧憬す、此に於てか彼れが如き偉大なる人格を玉成し來るを得たるも

古_の今_を貫_つて
神_の明_を御_す
皇_の治_を製_す
天_の義_を敬_む

のなり。而も現代人心の特に缺如せる所のものは一にこの現象を超越せる理想界の思想の貧弱なること是れなり。先帝陛下の御製に見ゆる、人の至誠以て始めて通ずるを得てふ、目に見えぬ神に對する信念の缺乏なり、是れ現代人心が多くは理想無く主義なく、節操無く徒に浮華虚榮幻影に捕はれ名聞利養の浮雲を追ひて一進一退しつゝある所以にして、社會風教の頹敗この秋より甚しきは蓋し是れあらざるなり、果して然らば這種信念の人生に必須缺く可からざる又此の點よりも之を察知するに難からざる可きなり。是れ又先帝陛下の御製に、

わが國は神の末なり神まつる

昔の手振忘るなよゆめ

と仰せられたる所以にして、古人が、

我國はいとも尊とし天地の

神のまつりをまつりごとにて

と教へし所以なりとす、今や明治聖帝敬神の大御心を詠み給へる幾多の御製と、その大信念の下に道德の修養を示めし給へる大御心を拜戴して、顧みて眼を現代人心の趨向する所に放ちて轉た長大息に堪へざるものあり、吁嗟我等身を社會人心の教養に任ぜるもの努めて能く自反慎獨、奮勵努力、夙夜聖帝の大御心に添ひ奉らんことを期せざる可からざるなり。聖帝の御製に曰く、

明治天皇御製

世の人を教ふことも難からむ

身のおこなひの正しからずば

と。以て眷々服膺宜く且暮我れ等座右の銘と爲す可きなり。

我が國體と神道終

補説

本篇は著者が既に世に公にせし論文に修正増補を加へて此に輯めたるものなり、是れ蓋し本書の第三章宗教に関する単見の領會には極めて必要緊切なるものあることを思へばなり、仍て姑く補説として讀者の參考に供す。

不徹底なる宗教の義解

宗教の個人と普遍性の高調より來る誤解——死後及び靈魂の問題のみを以て宗教の基準概念とする謬見——世界創造及び人類遺傳の信仰なきものは宗教に非ずとの謬見——經典と教祖の有無を以て宗教非宗教を分つゝの妄——無形抽象の理神と有形具體の神格——宗教とは何ぞ——その形式的概念——宗教の形式的概念より見たる宗教と道德との別——再び宗教とは何ぞ——その内容的把持——哲學と宗教——接神の實意識——佛基二教の實例——同々教の場合——イスラエルの宗教的天才と接神の實験——預言者の偶像破壊と接神の意識——釋尊の佛教に於ける偶像の闕如と神人融合——アイメの熊祭りと聖晚餐式の宗教的意義——神事に托せる淫猥なる宗教風俗の説明——禪宗に現れた

補説

先づ第一に實際問題に觸れて考へたいと思ひますが、世間は宗教と云ふものに對してどんな風に考へて居るかと云ふことから攻究の歩武を進めませう。

或人は、宗教と云ふものは個人的のものであつて、即ちお婆さんなりお爺さんなりがお念佛を唱へ又は基督教徒がアーメンを唱へて、佛に救はれ又は神に救はれると云ふやうなことを銘々に願ふものである、それであるから宗教は個人の教と云ふやうなことを目的として居ると。又宗教は非常に世界的のものであつて國家と云ふものは畢竟眼中にない、基督教にしる佛教にしるさう云ふものである、宗教の本質は何うしてもさう云ふものでなければならぬ、それが國家の方面と結付

くのは寧ろ宗教の方便である、宗教は世界的にして何處の國に行つても當筈まる様なものでなければならぬと。言換へれば宗教は個人的であつて又世界的のものである、隨て國家に衝突しない迄も國家を超越したものであると云ふやうな方面を非常に高調して、それに抵觸するものは宗教でない、斯う云ふ風に言つて了はうとする。さうして其方面から神道殊に神社に關する方面の神道と宗教との區別を立てやうとする人がありまして、神道は決して此意味に於て宗教でない、神道はすべて國家的のものである、それであるから神道は宗教でないと、斯う云ふ方面から宗教を觀る人があります。

併乍らそれは唯々佛教や基督教即ち吾々宗教學者が世界的宗教とか或は普遍的宗教とか名を付けるものを標本として之に神道と云ふものと對照するからさう云ふことになるのであつて、もつと外の宗教

を材料にして考へると宗教は決して一概にさうは云へない。無論宗教と云ふ中には基督教佛教の如き世界的個人的の宗教も這入るけれども基督教の出る前の猶太の宗教は猶太民族の信仰して居る宗教であつて民族的又は國家的であるが決して世界的の宗教でない、それが基督教になつて始めて世界的になつたのであつて、其以前は猶太國民だけが奉じて居る宗教であつたのである。又佛教以前には婆羅門教と云ふのがあつたが、婆羅門教は婆羅門族といふ種族若くは印度人丈の信じて居つた宗教であつて決して世界的でない。それであるから日本には決して婆羅門教は布教されて居らぬ。それを以て觀ても斯教が國家的であることが分る。又古代のアッシリアとか、バビロニアとか、或は羅馬とか希臘とか云ふ如き國がありまして一時非常な文明を有したのであります。此等の諸國に於ては矢張アッシリアなりバ

ビロニアなり或は希臘なり羅馬なりの國々の宗教があつたので決して世界的のものではない。即ちアイヌは日本人にアイヌの宗教を布かうと云ふやうなことをしない、臺灣の生蕃は生蕃だけの宗教であつて決してそれを外に傳道しようと思ふやうなことはしない。即ち基督教、佛教、又はモハメッド教とか云ふ此等の世界的宗教に對して古代各國の人民が皆其國々に固有の宗教を有つて居つたので國家的宗教と云ふものが十分成立つて居る。それであるから宗教は一概に皆世界的のもの個人的のものとのみ觀てしまふことは出来ない。

それから古代に於きましては大概何處の國でも國民と云ふものが基本になるのであつて國民單位であります。個人を單位として來たのは餘程後のことであつて、猶太などに於きましても古代の猶太民族即ち其時分はイスラエル民族と云つてをつたがその民族單位であつ

た。即ちエホバと云ふ神がイスラエル民族を特に保護する神だと云ふ考であつて、國家的宗教であつた、然るに個人の自覺の出來たのは、紀元前八世紀頃から猶太に預言者と云ふ一大宗教的天才が出て段々個人的思想を鼓吹したからでありまして、猶太の宗教を取つて考へてもイスラエル民族が基本であります。其證據には、イスラエル民族は神の寵愛し給ふところの人民、その特別に選擇した選民であると、斯う云う風に考へてをりました。希臘あたりでも矢張古代に於ては國家が本位であつて個人の位置を認めて居らないから國家的宗教であつたのであります。それであるから宗教は皆世界的若くは個人的のものであると勝手にきめこんでしまつてそこに宗教を片付けてしまひ其概念に合はないものは凡て宗教でないと言つて了ふことは出來ないであらうと思ふ。

又例へば佛教の如き世界的宗教でも、日本に傳はりました後には大變國家的になつた、例へば弘法大師などの言ふて居られます所も非常に國家的でありまして、大師が綜藝種智院式と云ふものを御書きになつて居りますが、其中に斯う云ふことを云はれて居ります。心住慈悲、思存忠孝と、即ち慈悲が佛教の原理であつて忠孝が國家の原理でありますが此兩者を調和して居られるのであります。一方に佛教の根本主義たる慈悲に従つて安心立命をすると同時に又一方には心を忠孝に存しなければならぬと云つて居られるのであります。佛教の中にも矢張り國家を眼中に置いて居る主義のあると云ふことは明かである。所が吾々の研究では是れが只日本に來て附焼及で出來たのでなくして、やはり印度の古い經文を讀むと釋迦自身が——言葉使ひは多少違ひますけれども——さう云ふ方面を説いて居るのであります。

それで所謂世界的宗教の中にも亦國家的方面がある、それだから宗教と云ふものを唯と通り一遍の解釋に従つて世界的個人的であると云ふ所で片付けてしまつて、而して例へば神道の宗教的方面と吾々が云ふものがさう云ふ側を有つて居ないから神道は宗教でないと言ふ議論は宗教史上の事實の探究がまだ足りない結果であると思ふのであります。

次に斯う云ふ説もあります。宗教には未來の觀念が必ず有る、又靈魂の觀念と云ふものが必要である。例へば眞宗の様な宗教にすれば、未來は極樂往生をする、未來は西方極樂世界に往つて佛に成ると云ふやうなことを云ふ。又如何なる宗教でも、死んで後に靈魂が極樂へ往くとか天道へ往くとか地獄へ落ちるとかいふやうなことを云つて、それが宗教の非常に大切な部分である、それが無ければ宗教とは云はれ

死後の問題及
靈魂の觀念
を以ての基礎
とする宗教の
見とする概念

ぬ、斯う云ふやうな點からして宗教の特色を彼の極く通俗な意味に解した未來の觀念、若くは人魂ひとたま然とした靈魂が死でから肉體をぬけ出して行つて天道へ往くとか地獄へ往くとか云ふ様な觀念が宗教の最大切な點であつて、其が無ければ宗教は成立しないと、斯う云ふ方面から考へる人があります。門外の御方は之れが當然のやうに御考へになるかも知れませぬが、宗教史上の事實から言ふと決して然うでない。成程知識の幼稚な民族——之を吾々は自然民族と云つて居りますが、其自然民族の範圍には、随分人魂然とした靈魂が肉體に在つて死んでから其れが遠くへ往つて所謂極樂往生をするとか云ふ考がある。昔希臘人は善人の靈の往く所をエリシオンと云つて居つた、又埃及人はアールの野と云つて居つた。エリシオンとかアールとか云ふ所へ往つて未來死後に靈魂が棲まふといふやうなことを云つて居つたので

ありますけれども、併し必しも其れがその宗教の中心中核ではないので、宗教の宗教たる所は他の方面に私はあると思ふ。其證據には、耶蘇の出ます前に猶太の地に於きましては先程申した預言者といふ宗教的天才が輩出致しましたが、其預言者の思想には今申した様な未來の觀念が一向無い。これは私が申す迄もなく西洋の學者が皆認めて居りますが、必しも人魂然とした靈魂の考はない。イスラエルの預言者の宗教思想と云ふものは要するに最も現世的なものである。此世に於て神の命に従つて正義を實行する、其處に宗教の使命がある、神は正しいものであるから吾々も人に依怙最負などをしないで、寡婦を苦しめたり孤兒を虐げたりするやうなことをしないで、正義を以て實行し正義に従つて行動云爲して行く、其處に神の救もあると斯う云ふ風なことを言ひまして、預言者の宗教と云ふものは一向來世といふことを

云はない。佛蘭西のルナンと云ふ學者は、イスラエルの預言者は正義の觀念を以て現世に於て立たうとしてをるので神は正義で在るから又自身も正義を行はなければならぬと云ふ正義の觀念に據て立つものであるといふことを力説して居りますが、實にイスラエルの預言者の宗教は、其位まで進んでをるのでありまして、未來又は靈魂の觀念は必しも無いとは申しませぬけれども、少く共其處に重きを置いて居らぬ。宗教の中心はそこに無い。地獄の觀念とか靈魂の觀念などが段々イスラエル民族に起つて來ましたのは、紀元前五世紀以來段々あの國が弱つて、人民がバビロニア邊りに追放されて異境の客となつて、エウフラテスの河の畔で故郷の天を望んで泣いて居つた時分から段々未來の觀念が出來て來たので、其以前には一向さういふものは無かつた。少く共其點に力を入れた宗教では無かつたのであります、而も預

言者が宗教的天才たるとは依然變はらないのでありますから、さうすると宗教の特色を最も通俗に解した未來の觀念とか靈魂の觀念に重きを置いて考へると云ふのは必しも當を得て居らぬと言へると思ふ。それから耶蘇の天國の觀念に就いても矢張り同じことが言へるのであります。耶蘇は矢張り其當時の迷信なども幾らか有つて居りましたが、耶蘇の天國の觀念には二種類あります。耶蘇が最も力を入れて鼓吹した天國の觀念は最も道德的である、所謂馬太傳(五)に、
心の清き者は幸なり其人は神を見ることを得べきが故に
と云ふ主義から彼の鼓吹した天國を考ふことが出来るのでそれは全く道德的で又現世的で決して遠くに在る天國ではない、最も近い處に神を認めてをるので、吾々が最も清い生活をするそこに所謂神をも見ることが出来るので、其處は佛教の娑婆即寂光土の思想がやはり言葉

を換へて耶蘇の教の中に説かれて居るものと思ふ。さうすると耶蘇の天國は寧ろ道德的で最も現世的であると言へやうと思ふ。

それから最も奇態に感ぜられるのは、即ち佛教と云ふ大なる宗教の開祖である所の釋尊であります。釋尊が始終靈魂のことを教へ或は未來極樂往生とか云ふことを鼓吹されたかと云ふと決して然うでない。寧ろ古い經文の證明する所に依ると、釋尊は婆羅門教の外道、即ち佛法に反對の學者宗教家が來て、全體靈魂は有るものか無いものか、釋迦と云ふ教主が死んで了つても尙ほ存續してをるかとか云ふ問題を提出したに對して釋尊は何とも答へなかつた。是が西洋の學者が佛教を研究して佛教は不可知説である、靈魂の未來などは分らないと云ふことを説く不可知説だと云つた所以であります。例へば箭喻經を讀みますと、徒に未來は何うなるかとか或は靈魂の有無などを論じて居

るのは、丁度敵箭に傷いた人が己を射つた此箭は全體何うして出來たのか、竹から出來て居るか木から出來て居るかと云ふことを分析的に研究して居るやうなもので眞の信仰でない、眞の信仰は決してさう云ふ所には無いと云ふことを喩を以て説いて居る。さう云ふ風で、宗教の開祖釋尊でも却て靈魂問題に就いては不可知者と云はれる位にそれを高閣に束ねて居られる方面がある。未來に就いても同じことであります、それでは釋尊の宗教の思想は何であつたかと云ふと、是れは言ふ迄もなく涅槃である。即ち佛教の最終理想である。佛教徒がいろ／＼その教を聽いて何處に達しやうとするかと云へば則ち涅槃である。涅槃に達しやうと云ふのが佛教の最終理想である。其涅槃を何う云ふ風に釋尊は解して居られたかと云ふと確にそれは現世的である。釋尊は三十五歳で佛即佛陀に成つたと云ふが、其佛に成つた

と云ふのは知的に云ふからの事である。佛陀と云ふのは宇宙の眞理を見開いた人と云ふことで、知的に云ふから佛に成つた悟つた者に成つたと斯う申しますけれども、其を他の方面から云へば、釋尊が佛陀に成られた時が即ち涅槃に這入られた時であります。吾々専門家は此釋尊の生きて居る時に入られた涅槃を有餘涅槃と云ふて居るが矢張涅槃である。釋尊は實にそれに到達されたのである。即ち釋尊が佛に成つた時が釋尊の理想地に達せられた時である。即ち涅槃に達せられた時である。知的に云ふから之を佛陀に成られたと云ふけれども、之を純倫理的若くは純宗教的に申せば涅槃に達したと云はなければならぬ。その涅槃に達した状態はどんな状態かと云ふと、それは阿含經と云ふお經の中に最も明かに説いてある。

貪欲永盡、瞋恚永盡、愚癡永盡、一切煩惱永盡、是名涅槃(雜阿含一八)

と是れであります。要するに煩惱は心の垢である、精神の穢い状態である。即ち人心の私である。貪欲永く盡き、瞋恚永く盡き、愚癡永く盡き、一切煩惱永く盡くと云ふのは即ち人心の一切の垢を洗ひ去つた状態である。釋尊が三十五歳で成道したと云ふのは即ち心の此垢をすつかり洗去つて、最早さういふ垢に染まらぬことは丁度蓮花が泥水の中から出て奇麗な花を咲かしてをる様なものであると巧な比喻で以て説いて居られますが、要するに其れが釋尊の涅槃であります。丁度耶蘇が心の清き者は幸なり其人は神を見ることを得べきが故にと云つた其状態でありまして、耶蘇の天國が現世的であると同く釋尊の涅槃も現世的である。さうして一方に於ては靈魂と云ふやうなものは人から質問されても寧ろさう云ふ事は哲學上の閑問題である、宗教に直接關係がないと云つて答へなかつたと云ふ位であるから、宗教の所

謂大切な所、宗教が宗教と云はれる所の大切な要素を靈魂や未來の觀念に持つて行くと云ふ事は預言者の教や、釋尊の佛教を宗教の範圍から取り除ける事になるので、此等の事實が許さぬであらうと思ふ。平田篤胤は佛教を評して、佛教と云ふものが極樂往生などを説いて居るのは詰らぬことである、己れはさう云ふことは大嫌ひだといふことを云つて居りますが、佛教にさう云ふ方面がないではないが、それが決して佛教の大切な所でないといふことは如上の説明で明瞭であると思ふ。是れは平田翁の「伊吹於呂志」の中に書いてありまして、私も他の著書中に引いて置きました、非常に面白い言葉で通俗化した極樂往生などといふことを最も痛快に罵倒して居ります。なか／＼痛快に書いてありますが、それが決して佛教の本体ではない——佛教の最も大切な所、その生粹に觸れて居らぬのは甚だ残念であります。氏は斯

う云ふことを云つて居ります。

拙者は、毛蟲と佛と、死ぬことは、きつひきらひぢや、夫はいかに、と云に、畢には一所に寄るには違ひなけれども、暫くなりとも、妻子に別れることは、五十日百日の旅に立さへ、物うきことだに依て、その一つに寄るまでは淋しからうと思はるゝで御座る、ぢやに依て、人は養生もして、長壽を保つやうにするも、大切のことで御座る、必ず房事過ぎ、吞すぎ、また心を遣ひすぎるも、甚だ宜くないことで御座る、是につけて、世の佛好な輩が、早く死たいなど、云ふことを、能く云ふものだが、合點ゆかぬことで、拙者の心には、不審な事に思はるゝで御座る、夫は如何と云ふに、極樂と云ふものは、段々申す通り、一向に跡もなき所なり、よし又有るにした所が、一向面白くないことぢや、まづ十萬億度と云ふ長道を、づらゝ行て、行きおほせた所が、蛙さへ重きに蓮に佛等と云

ふ口ずさびの如く、水中に生て居る蓮葉の上に、只一人つくねんとしては、さう居ずまひの能い人ばかりも有るまいし、殊には此の世に残つて居る、親屬や近づきが噂を云まいものでもなく、其時もし、噓でもする拍子に、落もすると、極樂のどぎゑもんになるから、是もこはものなり、また川柳が句に、屁をひつてをかしくもなき獨者、是はどうも笑はれまい、そなたの尻から己がおならが出たなど、云て笑つたり談つたり、踊たりする事もならず、たゞ屈まつて居る事は、何と否な事では無いか、どうしても速くその極樂へ行たがる人の氣が知れぬ、極樂よりは此世が樂みだ、夫はまづ、暮の相應にゆく人は、美濃米を飯にたいて、鱧茶漬、初堅魚に、劍菱の酒を呑み、煉羊羹でも給ながら、山吹の茶を呑んで、國分の煙草をくゆらして居らるゝ、また然いかぬ人は、ゆかぬなりに相應の樂みが有て、炭團でたばこは呑ながらも、番茶の口切

を、水道の水で煎じ呑み、鯨とにらめくらをした心持が、どうも云へぬで御座る、是をいやがつて、極樂々々と云ふのは、榮耀の上の貧好みやらで有ませう(平田篤胤全集一、伊吹於呂志、下、四六)いかにも是れは雄辯滔々として通俗化した佛教の極樂説を排斥したものであつて、どうも徳川時代のお婆さんお爺さんの佛教信仰は是れであつたらうと思ふ。けれども佛教の開祖たる釋尊の考は、先程申した様に、貪欲永く盡き、瞋恚永く盡き、愚痴永く盡き、一切煩惱永く盡き、是を涅槃と名づく、それが佛教の最終目的である、斯う云ふことを説かれるのでありますから、平田翁の批評は佛教の根本義には損益ないのであります。然らなりますると、單に斯う云つたやうな未來とか天堂極樂の様な所に宗教の大切な所を置いて、さうして、それだから然らういふことを云はないもの例へば神道の如きものは宗教でない、斯う言

世界人類の創造
及傳罪の類
遺傳無きの
信仰は宗
も非見
と教の誤

つてしまふことは何うしても出来ぬであらうと思ふ。所が、此方面から宗教の大切なる所を見て、その上で神道と宗教とのけぢめを付けやうとするものが随分世間に有るやうでありますけれども、吾々宗教の比較研究上から行けば甚だ遺憾に思ひますのが、此考は事實の上からも亦實に不完全なものであると云はざるを得ぬのであります。

又下の様な風に宗教を考へる人があります、則ち基督教の方面に就いて考へますと、一番初にエホバの神と云ふものがあつて天地を造つたと云ふことがバイブル(創世記)に書いてある、それから又アダム、イブと云ふ人間の初の先祖が神の命に背いて知識の木の実を食つて、遂に神の罰を受けて其れが遺傳罪として傳はつて、今日の人間も生れながらにして先祖の犯した罪を有つて居る、それを基督と云ふ人が出て來て、自分が神の子でありながら進んで十字架に磔になつて其アダム・イ

ブから傳つた人間の遺傳罪と云ふものを救つて呉れたのであると斯う説くのが基督教の通説であるから斯う云ふものがなければ宗教にはならないと云ふ風に考へる人があります。而して神道の如きは一向さういふ遺傳罪など、いふことは云つて居らない、又大工が家を造る様に神が天地を造つたと云ふことも云つて居らない、それだからして神道は宗教と云へぬと云ふ議論をする人がある。それから又佛教にしましても、眞宗の如き教になりますと五障三従の女人と云つて、女は非常に罪の深い所のものであるのみならず男と雖も畢竟罪業深重の衆生であると説く、されば罪の考は、宗教に大切な要素で、さう云ふことを説かないものは宗教ではあるまい、然るに日本の神道は佛基兩教に教へる様な罪と云ふことは少しも云つて居らぬ、成程大祓の祝詞などに天津罪國津罪といふことを云つて居るけれども、併しそれは人が

此の世の中に於て誤つて犯した過であつてアダム、イブ以來の遺傳罪と云ふ様なものとは丸で違ふ、だからして神道などで云ふ所の罪は餘程宗教上の罪過とは違ふ、仍て神道は宗教以外に置いた方が宜からうと、斯う云ふ議論をされる方があります。乍併今申しました創世記の話とか又は遺傳罪の話の如きは是れは一種のドグマ即ち教義であつて、基督教が猶太から起つて段々小亞細亞を経て羅馬に傳はり、其處等の國を経て行く間に段々教義として築き上げられた結果なので、或一派の頑固な基督教徒が、神は六日にして此の世界を造つてしまつたと云ふことを説くとすると、その言葉通りに六日間と云ふことを信じなければならぬとか、又基督が死んで昇天したことを事實として信じなければならぬとか云ふ様な、随分やかましい所謂信仰箇條を鼓吹しますけれども、併し今日の進んだ基督教ではさういふことはその教の要

諦ではない。殊にユニテリアンなどは、耶蘇も偉いことは偉いけれども、基督教徒が思つて居つたやうな特別の意味に於ての神の子ではないと云つてをる。兎に角只今申したやうなドグマを楯に取つてそれを基督教の特色とするやうなことは先づ今日の進んだ基督教徒には無い。すると之れは基督教の凡てに通ずる缺く可からざる要素と云ふことにはならぬ。

又歴史的に考へますと、創世記がバイブルの一番初にありませうけれども、併し創世記が必しも古いものではない。舊約全書の中にデボラといふ女の預言者が、イスラエル國民の勇氣を鼓舞した、宗教歌があります、其デボラの歌が一番古いものであると云ふことは今日舊約全書を批評する人の多く一致して居る所であります。それから廣く申しますと創世記の神話と云ふものはバビロニア、アッシリア邊りの神

話から段々變化してイスラエルに傳つて來たのである。決してイスラエル民族が一番初にあんな信仰を有つて居つたのでない。イスラエル民族は從來非常に樂天的の人民であつて、而して國家を保護する爲めに敵國外患に對して戰爭をする事のみ力めて居つたので、決して一種のセンチメンタルな憂鬱な宗教論や或は教理の様なことに沈溺して居つた人民ではない。それであるから、神が六日間に此世界を造つてしまつたとか、或はアダム、イブの遺傳罪が自分等に傳はつて居るとか云ふやうな考は、餘程後に起つたのでその旺んになつたのは彼等がバビロニア、アッシリアの爲めに苦しめられて遂にチグリス河とかエウフラテス河の畔に囚はれの身となつた頃から深く意識されて來たものであつて、其以前には餘り甚しくさう云ふ考に頓着して居なかつたのであります。それから印度のアリアン人種が段々インダス

河の上流から今の印度の地へ這入り込んで遂にガンヂス河の畔にやつて來たのであります。其インダス河の上流で信じて居つた彼等の宗教には決して靈魂輪廻と云ふ様な考はなかつた。佛教の教義の上に見るやうな輪廻の考と云ふものは婆羅門教にもありますけれども、是れは彼のアリアン人種がガンヂス河の畔に參つた後のことである。彼等はその初に於ては唯々天然現象を崇拜して、太陽の神とか或は嵐の神とか云ふものに讚美歌を捧げて、是れだけの御供物を上げますからどうか犢を澤山與へて下さいと云ふやうなことを神々に祈願して居つたので、之がインダス河の上流に居つた時代の彼等印度人の信仰であつた。決して前申した所謂遺傳罪のドグマのやうなもの、又は創世記の神話のやうなものはなかつた。それでも矢張印度人は宗教的天才である。即ち今日世間の一部の人が思つてをる宗教の大切な要

素を缺いで居つて而もそれが宗教的天才であるから、さうすると世間の一部の人の宗教の考は宗教の勝手な解釋であるので決して宗教の神髓に契つて居らないと云ふことになる。このことは近來の比較研究に於て明かになつて居るにも拘らず、さう云ふことは知らないで、唯自分勝手にバイブルを讀んで、そのまゝ宗教の事を論ずるから随分勝手な宗教の解釋が出て來て、それが又バイブルの根本思想の如くに思つて、其れを楯にして宗教を定義するので甚だ事實と違つた結論を來して來ると思ふ。是れは大なる誤解であつて而もそれが却て世間では本當の様に思はれてをる。此點から觀ても、もう少し専門家が宗教に關する自己の研究を披瀝して世に示す必要がありはせぬかと思ふ。さういふ風に考へますと、世間の人の考へて居る宗教に對する概念は非常に間違つて居りまして、それは纔に基督教の一部とか佛教の一

部に當儀まるものであるにも、關らずそれが宗教の全體でもあるかの様に思つて之を考へて居るのは笑止である。

尙又所依の經典、例之バイブルとか回々教のクルアンとか佛教の一切經とか云ふものを有せぬものは宗教で無いなどと云ひ、或は又教祖の無きものは宗教で無いなどと云ふ人があるが、之は反駁する迄も無く宗教に對する素人の見解で教祖無く聖典無き宗教は世界には無數に是れあるのであつて、野蠻人の宗教は皆之れである。

終にも一つ世評に就て申して置きますが、從來日本の古風の國學者とか或は漢學者の中に斯う云ふことを申す人がありました。日本の神様と云ふものは支那の所謂神とは違つて居る。例之支那で神と云ふのは所謂神妙不可思議の理を云ふので、私共の言葉で翻譯すれば、宋儒が理と氣の説を立て、宇宙の根本義を理と云ふて居りますが、さう

經典の有と無を以て分つて宗教を妄に非つた

無形抽象の理と神格とを有るものと具體とを

いふ無形無象の理、即ち云は、抽象的概念が即ち神であつて、隨つて之は天然の法則ナチュラル、ローとでも謂ふ可きものである、宇宙間の神妙不可思議の理で夫が神であると、支那では云ふが、日本の神と云ふのは皆有形的であつて、先づ人間を神として居る、又祖先が日本では神になつて居るのみならず、山の神、川の神なども皆有體的で、少くとも形體の有るものである、だからして日本の神と支那の神とは非常に違ふ。斯う云ふことを標準にして日本の神の特色を擧げて居ります。成程宋儒の理の考と日本の神祇の觀念を比較すればさう云ふ風に言へるのは尤もである。所が段々世界の宗教に就いて比較研究をして行きますと、大變日本の神様に似たやうな神様が世界の宗教界にあることを發見するのであります。殊に希臘のホーマーの詩の中に歌はれた神様と云ふものは餘程日本の神様に似た所がある、それは大變人間的

の性質を具へてをる。又希臘では天然をも日本の様に神として居る。丁度日本に山神とか海神がある様に希臘にも山の神とか或は海の神がある、して見ると希臘でも此意味に於て神は日本と同じく有體的である、と云へる。決して神妙不可思議な無形の理ではない。然かのみならず日本では人の中に神を見てをる。これが日本人の一つの神を考へる特性でありますけれども、希臘でもさういふことがあります、有名なアレキサンダー大王が東西文明を調和する爲めに自分はツオイス、アモンと云ふ神の化身であると云ふことを宣言した。ツオイスと云ふ希臘の天の神とアモンと云ふ埃及の太陽の神とを一身に結付けて居る。彼は當時世に知れてをる東西の偉い神様を二つ結付けて一つにして其れの化身であると自ら稱した。さうすると矢張人間の中に神が見出される譯でありまして、アレキサンダー大王が第一其例で

あります。それから又羅馬には皇帝崇拜と云ふことが行はれて居たので、例の有名なシーザーは勿論神だし、又彼のアウグスツス皇帝の如きは生きて居られる内から神として崇拜されて居つた。さうして小亞細亞のブリエネなどの土地で發掘された遺物に據りますと、恰も基督教徒が耶蘇基督に頌徳辭を奉る様な言葉をアウグスツス皇帝に奉つて居る碑文が見えます。アウグスツスは明かに神とされて居つたことが之れからも分る。又もう少し幼稚な野蠻民族例へば濠太利あたりの土人の中には、人間が神になると云ふ信仰が随分あつて、殊に酋長の如きは神と崇められる。さうして酋長の居る周圍には供物などを獻げる、時には人身供犠をも奉ると云ふことである。さうすると人間を神と視たと云ふことは随分諸方にある譯で、随つて是れは有形的有體的の神であつて無論神妙不可思議な無形の理ではない。さうな

ると神は神妙不可思議の理を云ふのであつて日本の神は然らう云ふものでないから支那の神と違ふと云ふことは云へますけれども、世界一般の宗教と比較するときになれば日本の神様と世界の神様とが大體一になつてしまふからさう云ふ點では區別が付かぬと思ふ。それで現代は色々斯う云ふ新しい方面の材料が這入つて居りますから、それ等を觀來つて、さうして宗教と云ふ概念を何處に置いたらよいかと云ふことを考へなければならぬことになつたので、隨分面倒な厄介な事でありますけれども、それに依つて宗教の本性が明かになるのでありますから、専門家は餘程努力して材料を蒐めて而して後に宗教と云ふものは畢竟如何なるものであるかと云ふ概念を作らんければならぬと思ひます。

宗教とは何ぞ

さう云ふ風でありまして、私共はどうも世間で宗教に就いて考へて

その形式的概念

居る所が不十分である様に思ふのであります。そこで然らば宗教は何う云ふ風に觀たら宜いか、斯う云ふことになりますと、それは甚だ平凡であるので決して私の新しい考でもなんでもないが、地獄極樂とか靈魂とか云ふやうなことを以て其特色とするよりも、宗教は神と人間との一種の關係である、斯う云ふのが宗教の一番適切な形式上の定義であると思ひます。是れは今日新に私が言ふのではない。之は教父時代に出ましたラクタンチウス Lactantius と云ふ神學者の説にも見えますので決して新しい考ではない、又歐羅巴の學者が大分言ひ古るして居るのでありまして決して新しくはありませぬが、私は其れが宗教の概念としては一番穩當であると思ひます。斯う云ふ風に言へば佛教にも宗教の考が當筈ましますし、基督教にも無論當筈まします。基督教は勿論神と人間との關係を説くのである、又佛教も一例

で云へば阿彌陀如來と人間との關係であつて、人は阿彌陀如來に救はれると説く、斯く神と人間との一種の關係と云へば總ての宗教を網羅することが出来ると思ふ。彼の首狩を専門にして居る臺灣の生蕃の中にも一種の靈魂ウトフのやうな考がありまして、其スピリット即ち一種の神でありますが其れと野蠻人との關係が矢張彼等の宗教であると、斯う云ふことにすれば宗教の一番範圍の廣い定義であると思ふ。そこで私は何うしても比較宗教學上から宗教とは何であるかと云へば、神と人間との一種の關係である、と斯う云つて置きたいと思ふのであります。

宗教の概念的形態より見ると、別道と宗教との

斯様に申すと此處で直に宗教と倫理との區別も附くのであります。今日の進んだ宗教に於ては宗教と道德とは密接なる關係があつて離すことが出来ない。例へば先程申しましたやうに一切煩惱永く盡き

た状態が涅槃である、其れが宗教の理想であると云ふならば、人心の垢をすつかり去つてしまつて道心の清きに住した所が宗教の極致である、其意味からは宗教と道德とが一に歸してしまふとも言へる。又基督教にしても、心の清き者は幸なり其人は神を見ることを得べきが故に、と云ふからには矢張宗教が道德に喰込んで居ると思ふ。進んだ宗教に於ては道德と宗教は二にして一と云ふ方面がありますけれども、併乍ら又宗教的經驗と道德的經驗とは違ふ。私は宗教を定義して神と人間との一種の關係と申しましたが道德は五倫五常と云ふやうなことを説くのでありますから、道德は人間と人間との關係であります。父子親あり君臣義ありと云つた所が道德でそれは人間と人間との關係である、これは人間以上の神と人との關係ではない。此處に宗教と道德との區別があると思ふ。そこで神と人間との一種の關係を宗教

と云ふならば、道德といふ宗教に能く似た事實と宗教との區別が明瞭に付くので、これは大變好い宗教の定義であると思ふ。それであるから例へば禪宗などに於て不思善、不思惡といふことを云ふ、善惡は道德の範圍である、宗教である所の禪宗の方では不思善、不思惡である。禪は現象世界の事を總て妄相分別の結果とするから、其妄相分別を超越した所が禪の禪たる所である、善と惡の區別を通りぬけた所に宗教の本體があつて其處に本來の面目現前する所があると、斯う云ふ風に言ふのが禪宗でありまして、それは確に道德と違つた現象であると思ふ。即ちこれは宗教である。それで、神と人間との一種の關係と云ふ風に宗教を観ると宗教と道德との區別が善く付くので、私は其の方から觀ても宗教の此の定義が宜いと確信して居るのであります。

宗教とは何ぞ

唯々この定義は宗教を外から觀た定義であります。大風呂敷を

その内容的把持

擴げたやうに觀れば佛教から基督教から總て此の定義中に這入りませす。けれども、之れを他の方面から批評して申上げなければならぬのは、此宗教の定義中に見ゆる神と人間との一種の關係と云ふ點であります。神と人間との一種の關係と云ふのは非常に抽象的な言方であるので、其の内容を規定する必要がある。一種の關係と云ふのは、何う云ふ關係か、其の關係を明かにする所に宗教の所謂精髓が見えるであらうと思ふ。それで私は神と人間との一種の關係と云ふことを宗教の形式的定義と云はうと思ふ。外部から宗教の輪廓形式を規定した定義であると思ふ。それで一種の關係と云ふことは何う云ふ内容をもつてをるか、斯う云ふことになりませんが私は簡單に之を申して、神と人間との融合歸一の状態であると言はうと思ふ。そは神と人間が融合調和すると言つてもよい。神が人間と結付く状態即神と人間の

融合歸一の状態が宗教である。或は又神人の共在俱存と言ふてもよい。普通の言葉で言ふと神と人間が共に居ると云ふ觀念であります。道德を實行するには神が有つても無くつても出来る。若し是れが出来ぬとすれば今日の小學校などで倫理は教へられない譯である。而も今日小學校で道德だけは教へる。これは則ち神が有つても無くつても道德だけは實行が出来ると云ふことを證明して居る。唯々其の道德實行の實力の強いか弱いかと云ふことは問題でありますけれども之を實行することは出来るのであります。併し宗教は然うでない。即ち神無しには宗教は成立しない。宗教は神と人間の融合歸一或は共在俱存の状態である。我は神と共に居るのである、我は神の内に住まつて居るのであると云ふ様な意識、是れが宗教の特色であると思ふ。是を私は神人の共在俱存の意識状態であると言はうと思ふ。或は從

來の言葉を借りて申せば、神人の感應道交と言つてもよい、西洋では之を聖交、神と人との神聖な交と言つて居る。或は少し神秘的に言ふ人は之を神人の祕的交通と云ふ語を以て申します。私は神人のコムニニアンと云ふ所から神人同交と云ふ語を使ひたいと思ふ。神人の一種の關係と云ふ事はかう云ふ方面からも付いてくる。此處が又宗教と哲學の區別が明瞭に付く所であつて、此處を非常に強く言ひたい。哲學も矢張絶對と人間との關係である。哲學は宇宙の本體とか絶對とか云ふものと人間との關係である。けれども宗教は絶對を神と見てさうして神と人間の融合接觸と云ふことである。それが即ち宗教であつて宗教は神と人との融合接觸する實意識である。則ち唯さういふことを口で言ふばかりではない、自身が實際さういふ位置に在ると云ふ氣分になる所に宗教が存在してくる、斯う私は宗教を見た

いと思ふのである。

かう申してくると宗教と云ふ一種の心的經驗の性質が明かになると思ひます。佛教のお經の中に或る非常に暑い日に曠野を旅行して居る人があつて、段々歩いて居る内に咽喉が渴いて渴いて仕様がなくて、何處かに水はないかと思つてさがして居ると其處に一つの古井戸を發見した。覗いて見ると如何にも冷たさうな水が湧き出してを、若し此水を飲んだら必ず渴を癒やすであらうと云ふことは分つたが、遺憾ながら其處に水を汲む可きところの釣瓶も何も無い。斯くこの井水を飲んだら必ず自分の渴を癒やして助かるだらうと云ふことの分つた時の心の状態は是れ即ち哲學であります。宇宙の絶對とか本體と云ふやうな理窟を研究して、論理的に之を不可知的とか、或はシヨールペンハウエルの言つたやうに宇宙の意志とか云ふ様なことを

口にして居る間は、丁度この井戸の水を飲んだら必ず渴を癒やすだらうとのぞいてをるところの状態である。然るに今水を確に釣瓶によつて汲んで一掬ひ味はつて、ア、是れで助かつたと云ふ氣になつた心の状態が宗教である。それを私は神人の關係の實意識であると云ふのである。禪宗に於て「冷暖自知」といふことを説くのも全く是處であると思ふのであります。唯々冷いか暖いか云ふことを人から聞いても分るが、それは只理窟上分つたので、ほんとの冷暖自知では無い。それであるから宗教は實際生きて居る精神現象である、即ち感情とか意志とか云ふものが主に働いて現れる事實である。之に反して哲學は唯其井水を飲んだら善からうと云ふことを知つた時の有様である。斯う云ふ方面から觀ると哲學と宗教の區別もよく付くと思ふ。

これは獨り私が勝手に言ふばかりでない。例へば耶蘇の弟子のボ

「ロ」が既に之を言つて居る。「我は神と共に働き、生き、さうして在る」と。又「ポーロ」は「神と共に働く吾等」は非常に幸であると言ふてをる。「神と共に働く」といふ意識が即ち宗教の大切な處である、神人の共存の關係である。我は一人で居るけれども何ぞ知らん、二人だ、一人ではない、即ち神と共に居るのだと云ふ意識、斯う云ふのが即ち宗教といはれる特色の出づる心的經驗であると思ふ。それは全く基督教と性質の違つた佛教でもさう言へるのである。例へば親鸞聖人などは、煩惱に眼さへられて、攝取の光明見ざれども、大悲倦きことなく、常に我身を照らすなり」と云つて居られる。自分は煩惱にさへられた眼で本當に見ることは出来ぬけれども何ぞ知らん如來大悲の光明は始終自然を照らして居ると云ふのでありますから、佛の光明の中に住まつて居ると云ふことになる。之を親鸞は或は又「攝取心光常照護」とも云つて居る。

傳教大師最澄が、

阿耨多羅三藐三菩提の佛等

我立つ柚に冥加あらせ給へ

と云つたのも同一宗教的經驗である。其點から言へば黒住教と云ふやうなものも同一の經驗を有つて居つて、

天照神の御腹に住む人は

ねてもさめても面白哉

である。是れは天照大神を本尊にして居るから我々が天照大神の御腹の中に住むと云つたので、ポーロの語とは言葉は違ふけれども同じ精神状態であります。嗚呼天照らす神の御腹に住む人はねてもさめても面白哉。これが矢張宗教の實意識である。即ち神と共に居るとか神と融合歸一するとか云ふ精神状態がこゝにはよく現れて居る

我が國體と神道
からであります。

又これはモハメッド教に就いても言へるのであつて、モハメッドと云ふ人は御承知の通り非常に宗教戦争をやつた人で、或時は非常に負けまして、丁度源頼朝が石橋山の戦争で負けて真鶴の方に逃げて行つて大きな木の洞に隠れて居つた様に、モハメッドはタウルと云ふ洞窟の内に這入て従者のアベクルと一緒にそこに隠れて居つた。時にアベクルが曰ふには、我等は只だ二人でいかにも危険である、雲霞の如き敵がドン／＼窮追して来る。怖いと云つて顛えて居ると、モハメッドが、如何ぞ我等二人と云ふや、我とお前の外に尙第三者がある、その第三者とは即ちアルラーの神であると曰つた。モハメッドと云ふ様な一つの宗教を開いた人には矢張神と共に居るといふ意識があつたのであります。それは又モハメッド教とは非常に時代も違ひ又處も

違ふ印度の宗教にも見えて居る。例へば佛教以前に婆羅門教があり婆羅門教以前に吠陀教があつたのであります、その吠陀教のお經を讀みますと、ヴルナと云ふ神様があつて、此ヴルナのことを吠陀を書いた詩人は何と歌つたかと云ふと悪い奴が二人をつて、誰も見ないから悪い事をしやうと考へるかも知れんが何ぞ知らんヴルナの神が天で見て居るではないかと言つて戒めて居る。それが神人の共在俱存の精神状態であると思ふ。それはバイブルの方で言ひますれば舊約全書の中の詩篇の語に其精神状態が最もよく表はれて居ります。

我いづこにゆきてなんぢの聖靈をはなれんや、われいづこに往てなんぢの前をのがれんや。われ天にのぼるとも汝かしこにいまし、われわが榻を陰府にまうくるとも視よなんぢ彼處にいます。

かうあります。即ち天に上らうが地獄へ行かうが神と共に居ると、斯

う云ふことを歌つて神を讚美して居る。これが即ち宗教的意識と呼ばれる所のものの特色であると思ふのであります。

それから先程申しました預言者のことでありますが、預言者は宗教的天才であつて、始終神と共に居ると云ふ意識があつたのであります。全體預言者といふ語の原意がそれを示して居る。預言者といふと日本では何か未來の事を預言して、來年は大地震があるとかいふやうなことを言ふのを預言者と思つて居るけれども、イスラエルの預言者は然らでない。預言者は希伯來語でナビー(Nabi)と申します。ナビーと云ふのは簡單に申せば、神の口になる者といふので、つまり神の代言人です。人間であるけれども其預言する時だけは神が乗移つて之に物を言はせるので預言者自身が言ふのではない、神に言はせられるのである。預言者とは斯う云ふ意味であります。それであるから預

言をするときには預言者が自分で言ふのではない、神がその人に言ふのである。預言者に神が乗移るから預言者と神とは一緒になつてしまふので、やはり神人の融合同化と云つてもよい。かう云ふ人がイスラエルの宗教的天才であるから、何うしても我は神と共に居る、神と一になると云ふことが、宗教に一番大切な特色であると思ふ。日本で神懸と云ふことがありますが、神懸といふのは矢張神が懸かつて來るので、即ち神と一緒にになることである、即ち預言者と云ふのは神懸の状態になつた人である。また預言者の宗教と云ふやうな進んだ宗教を引用するまでもなく、彼の滿洲蒙古の地方に行はれて居るシアマン教ではシアマンと云ふ一種の坊主に神が乗移つて居ることを言はせるので、支那人は其シアマンのことを跳神と申して居ります。人間だけれども其時だけは神が乗移つて跳る所の者と云ふ意味で跳神と

云ひます、是れは非常に面白いことで、こゝにも神人の融合歸一又は共在俱存と云ふことはあらはれてをる。

そこで又非常に面白いことが起つて來るのであります。即ち宗教といへば直ぐ佛像と云ふやうなものを聯想して、あゝいふものを拜まなければ宗教でないやうに思はれますけれども、何ぞ知らん宗教的天才である預言者が偶像禮拜を非常に禁じて居る。これが亦非常に面白い現象であります。其性質を遺傳して基督教が他の宗教を偶像教と云つて無暗に罵倒して居るのであります。其善惡及び其事が正しいか正しくないかは今論じませぬが——兎に角なぜ預言者といふ宗教的天才が普通の人が宗教上大切であると思つて居る所の偶像を要らぬと言つたか、要らぬと言ふのみならず、害が有ると言つて之を禁じやうとして居たか、斯う云ふ面白い問題が出るのであります。それは

預言者の
偶像の
破壊の
意識

私共の云ふ神人の共在俱存の精神状態が宗教であると云ふことから言へば明瞭に説明がつくのであります。なぜならば神と共に居つて神と面接して話をするのが預言者であるから、時としては預言者は神と一緒に居る。それ程の活きた信仰のある預言者であるから何を苦んで神の寫であるところの偶像を持つて來る蛇足を添へんやである。若し吾々が生きた友人と共に居つて互に交際して居る間は其友人の寫眞は別に欲しくない。けれども一たび其友人が死んでしまつて最早其友人に會はうとしても會へぬ、談話を交換しやうとしても其れが出来ぬと云ふ時になると、初めて其友人の寫眞を床の間に飾つて之れに御供物を捧げる氣になる。友人が居なくなつて初めて寫眞が必要である。神と共に居ると云ふ意識のある間は神の寫眞に外ならぬ所の偶像は必ずしもその要を見ない。斯う考へるといふと神と感應道

交して居つた預言者が偶像禮拜を禁じたのは尤千萬であると私は思ふ。

これは又佛教に就ても同じ事が言へるのであります。成程日本の佛教などは随分偶像を禮拜してをる。真宗の如きは親鸞聖人の木像を祭り、又眞言宗の如きは何でもござれで掃溜の様にいろ／＼の像を祭つて居て、世間から多神教だの偶像教だのと云はれて居りますが、いかにも初めて見た時はさう見えるでありませうが、釋迦自身の宗教には偶像の無かつたことは餘程面白い現象であります。印度に佛像の發達したのは希臘あたりの美術が這入つてからの事で、釋迦自身は決して偶像に向つて禮拜などをして居らない。元來婆羅門教に於ては梵天を大切なものとして梵天と融合同化することが即ち婆羅門教の目的として居つた所でありますが、其梵天と全然融合同化の出來たの

釋尊の佛に於ける偶像の融合と神

が即ち釋尊であります。つまり自分自身が神であるから何を苦んで他に又神の像を作らんやである。さういふ譯であるからして釋尊は決して偶像を拜んで居らなかつた。これは宗教史上餘程愉快な現象であるのです。

さういふ風で、宗教上の非偶像主義がやはり宗教を以て神と人間の共在俱存であるとか、その兩者の融合同化であるとか云ふ考から説けば非常に能く説けるのであります。

尙爰に私は此等の點を明かにします爲にもう少し幼稚な宗教に就いてお話しして見たいと思ひます。即ちアイヌの熊祭などについても同じことになるのであります。御承知の方もありませうが、アイヌは熊祭と云ふことをする。あれは私共宗教學者の方から申すと一種のトテム崇拜と云ふので、トテム崇拜と云ふのは亞米利加印度人の間

アイヌの聖儀と熊祭の意義

に多く行はれて居る宗教でありまして、それは何う云ふのかと云ふと
トートムとは一種の動物を指すので、これは亞米利加印度人の使ふ言
葉であつて西洋語に翻譯が出来ないので只トートム崇拝と呼んで居
るのであります。或動物が自分の先祖であつて同時に神であると謂
ふ信仰上その動物を崇拝するのがトートム崇拝です。即ち茲に狼な
ら狼があれば、或アメリカ印度人の種族は自分の先祖があの狼から出
たものであると考へ、その結果之を神に祭つて大切に於て滅多に殺し
てはならぬと云ふやうな信仰を有つてをる。つまり動物崇拝と祖先
崇拝と結付いたものがトートム崇拝である。アイヌの宗教に就きま
しては英吉利の宣教師のバチエラーと云ふ人が殆ど三十年も研究し
まして、其爲めに専門學者となつて學位まで貰つて居りますが、此學者
の研究に依りますと、アイヌの熊祭は矢張一種のトートム崇拝である

と云ふのであります。と云ふのは、アイヌが熊祭をするに就いては、先
づ山へ行つて熊の子を捉まへて來て、さうしてアイヌの女が自分の乳
で之を育て、相當に大きくなつた所で殺して熊祭をする。其時祭る
神と云ふのは天地の神であるが、彼等の信仰に於ては熊は矢張り又神
である。即ち一方から言へば神である所の熊を殺して、さうして其肉
を天地の神に供へ同時に其處に集まつた信者がそれを食べる。是れ
は何う云ふことを意味するかといふと、宗教は神と人間の接觸同交或
は融合歸一を云ふのであるから、神の肉が信者の腹中に這入つてしま
へば是程神人の接觸同交はない、物質的接觸同交の最もよく出來たも
のである。斯う云ふ意味からして平生は一般にトートムたる動物を
殺さないのが通則だか、アイヌの場合は特別に祭をするのだから熊を
殺して食べるのである。神たる熊を殺すといふことは大變をかしい

様であるけれども、これは野蠻人の宗教にはよく有ることと例へば或野蠻人の如きは其會長を神の顯現と考へて居り、人間を犠牲として之に供へる位であるが又妙な迷信があつて、其神の顯現である會長が天壽を以て終はるとも神は其生命がなくなつた譯で、即ち神が世に無くなつて仕舞つたことになる、斯う云ふ考からまだ本當に壽命のつきない内に其會長を殺してしまふ、即ち會長になつたが最後一定の年齢に達すれば殺されてしまふ。さういう奇習が蠻人間にある。であるから此場合會長即ち神を殺すと云ふことは彼等の社會に於てはなかなか意味がある。トーテム崇拜の場合の神である、動物を殺すといふのも深い意味が含まれて居るのである。兎に角唯今申しました様に神の肉を食へば最もよく神と接觸同交が出来る、と云ふ所から熊祭をやるのである。又發達した宗教にも其形は遺つて居りまして、基督教

神事淫猥に
せざるに
なる宗説
なせる
風俗の
明説

に於ける聖晚餐式の如きは其れであります。唯々宗教に發達階級の高低があるだけで原則は同じである。即ち聖晚餐式に於ては信者間に葡萄酒と麴麩を分けて是れは神の血である、是れは神の肉である、と云つて飲んだり食つたりする。つまり今まで葡萄酒であつたもの麴麩であつたものも其信仰を以て飲食すれば基督の血になり肉になると云ふのであります、やはり神の子である基督の血と肉とが信者の腹の中に這入れば是れ程の神人同交はないのであつて此處に宗教の宗教たる處が現れて来るから斯様なことをするのであります。これもアイヌの熊祭と其根本的精神は同じであると思ひます。

それが最も淫猥な方面に發現したのは Holy Prostitution と云ふ現象である。是れは小亞細亞邊に行はれて居るのであります、其處にアスタルテと云ふ女神が崇拜されて居る。大變淫猥な宗教的儀式と結

付いた神様でありまして、其祭は大抵森林中で行はれるのであります。その森へ若い女などが出掛けて行つて其處で一夜を明かす。而してアスタルテに仕へて居る所の坊さんが来て其等の女を犯してしまふ。さうすると其坊さんを矢張神様の現れと彼等は信じて居るので、之に由りて信者の女は神と接觸同交することが出来たとして非常に喜ぶのです。此等は矢張神人の接觸同交といふ宗教の精神が妙な性的方面に現れたのであります。それから喇嘛教に於てはなぜあゝいふ妙な男女交合の佛像などを崇めるかと云ふと之も矢張神人の接觸同交融合歸一と云ふ處から来て居るのであります。即ち宗教の本性は神人の接觸同交に在るが、その接觸同交は聖晚餐式のやうに葡萄酒と麵麴でも出来ませうし、又は印度の神秘的な行者がやる様に所謂樹下石上で坐禪觀念してやることも出来るでありませうし、いろ／＼ありま

すけれども、それが流れ／＼して妙な風に現れて、男女の交接と云ふことを標準にして神との接觸同交を考へて来た、それで斯様な偶像が出来るやうになつたのであります。が、さういふ風で、何うしても神人の接觸同交とか融合歸一とか云ふこと、其れが各宗教に通じた根本的の大切な點であると思ふのであります。それが例へば先程申した眞宗の如き宗教に於きましては攝取心光常照護で、佛の光明の中に照らされて自分は大悲の光明中に住んで居ると云ふことになつて現はれ、斯う云ふ美しい倫理の方面とも少しも衝突しない信念になつて現れる。又彼の加持祈禱と云ふ事であるが、眞言宗などの加持祈禱とさくと如何にも迷信の様であるけれども、何ぞ知らん之には非常に宗教的意味がある。弘法大師は即身成佛義と云ふ書物の中に、
加持者、表如來大悲與衆生信心、佛日之影現衆生心、水曰加、行者心水能、

感佛日名持ずるをに

と云つて居る。即ち佛の精神が衆生の心の水の上に映るのを加と曰ひ、衆生の精神が佛の大悲に感應するのを持と曰ふと云つて加持の事を説明して居る。加持の二字に於ても神人の共在俱存と云ふか融合歸一とか云ふことが最もよく表はされて居る。さすが弘法大師であつて弘法大師は斯の如く宗教的經驗に富んで居らるゝのである。

上來私は主として吾々の言葉で申す他力教と云ふ側に就いてお話を致した、即ち衆生と佛——吾々人間と、神とか佛とか云ふものゝ關係に就いてお話を致しましたが、それでは禪宗のやうな一種の佛教があるが是れは何う云ふ點で神人同交と言へるか、斯う云ふ問題が起ると思ひます。禪宗では「釋迦何人ぞ我何人ぞ」と云ふて、佛様も叱り付け達磨大師も叱り付けると云ふやうな豪い調子である、所謂「天上天下唯我獨尊」と

禪宗に現
はれたる
實接神の事

は是れである、さうすると禪宗では何處に神と人との融合同交とか共在俱存とか云ふことがあるだらうか、斯う云ふ議論が起ると思ふ。けれども、成程禪宗は一方から言ひますと、佛何人ぞ我何人ぞ、直指人心見性生成佛、此心即ち佛であると云ふやうなことを言つて、外部に佛を認めないやうに見えるのであります、併し禪宗も亦宗教である、やはり私の申した神人の融合同交とか又その共在俱存の實感實驗無しには成り立たない、そこで禪林類聚と云ふ書物を見ますと、傳大士と云ふ人が斯う云ふ偈を讀んで居る。これで見ると明かに神人の融合歸一といふことを禪宗の方面からもやつてをると思ふ。

夜々抱佛眠、朝々還共起、起坐鎮相隨、語默同居止、

纖毫不相離、如身影相似、欲識佛去處、祇這語聲是、

夜々佛を抱いて眠る、毎朝共に之れと起る、眠るにも起るにも佛と

共に居る。起坐鎮に相隨ふ——起つも坐るも佛と一緒にする。語黙同じく居止す——話をするときも黙つて居るときも佛と共にやる。纖毫も相離れず——是れ即ち神人の融合歸一或は共在俱存である。身影の如くに相似たり——身體に影の隨ふが如くである。佛の去處を識らんと欲せば——佛が何處に行つてしまつたかを識らうと思へば、祇ただ這語聲是れなりで——要するに眠るにも起るにも、起つにも坐るにも悉く佛と共に居るといふことを云つたのでありまして、神人の共在俱存の感じがこゝにも明かに現れて居ると思ひます。

布袋和尚の無所住歌に

吾有一軀佛、世人皆不識、不塑亦不裝、不彫亦不刻、無一滴灰泥、無一點彩色、人畫々不成、賊偷々不得、體相本自然、清淨非拂拭、雖然是一軀、分身千百億、

と云へるも亦此立脚地より解す可きである。

此點は諸所に現はれてをるので、諸君は碧巖錄の講義を御聽きになつたらうと思ひますが、有名な梁武帝と達磨の問答に於てもこれはよく現はれて居ると思ふ。達磨が支那に布教しやうと思つてわざ／＼やつて來た。さうして武帝に會つていろ／＼法を説かうと思つたのであるけれども、武帝はあゝいふ人で、甚だ不得要領である。そこで達磨は武帝を以て迎も語るに足らぬ人物と云ふことを悟つて、そこを去つて楊子江を渡つて少林寺といふ寺に入つて面壁九年をやつた。然るに、一方梁武帝は始終宮庭に出入して居つたところの偉い高僧に向つて一日曰はるゝに、達磨と云ふ坊主が來たけれども一向要領を得ない奴だ、己れが隨分寺を建てたり僧を供養するから非常に功德が有ることだらうと言つたら、其れは無功德だと答へた、飛んでもない坊主が

やつて来たものだ、斯う言つて話をした所が、其高僧が何と言つたかといふと、それは大變な間違だ、おれは觀音大士の化身でありますと申した。即ち武帝は常に觀音の信仰が深かつたから、其れを利用して、あなたが始終信じて居られる觀音の化身でありますと、斯う言つたから、武帝は非常に驚いて、それは大變だ、それでは速く行つて達磨を迎へて來いと云ふので、早速使者を走せて迎へに遣つた。迎へに遣つたけれども無論達磨は歸らない。そこで其高僧が更に曰ふのに、これは使者どころではない、梁の全國民が達磨を迎へに行つても達磨は歸りませぬと。益々武帝は弱つてしまつた。それは大變なことになつたと云つて非常に悔んで居られると、其高僧が更に何と曰つたかといふと、これは御承知の通り碧巖錄の初に出て居ります文句で、斯う云ふことを曰つて居ります。

千古萬古空相憶。 休相憶。 清風匝地有何極。

と。ア、悪いことをしたと言つてクヨクヨして居るが、悔やまんでもよい、達磨が去つてしまつたと思ふと間違ひであつて、清風匝地有何極——清風滿地じや、水は澄潭に在り、月は天に在り、江山風月常主無く、閑者即是れ主人、青々なる翠竹盡く眞如、鬱々たる黃花亦皆眞如である。達磨は此處に居るではないかと、斯う梁の武帝に一本きめこんだのがこれであります。俗見を以てすれば達磨は去つてしまつた様であるけれども、宗教的眼光を以て觀れば然うでない、觀音大士の化現の達磨のことであるからたとひ眼には見えぬ此處には居ない様でも彼は十方法界外に迄充滿して居る、大なる宇宙の實在である、一度悟つた眼で觀るならば清風匝地有何極で、實は達磨は此處に居るのである。斯う云ふ問答であります、その問答法は禪的であるが、茲にやはり人間と神

との關係と云ふ宗教の特色が極めて明瞭に出て居るのである、故に禪宗も亦宗教であると云はれるのであります。之を千載和歌集に耀空上人と云ふ人が、

彌陀たのむ心の中に隔なき

佛はさらに身をも離れず

と云ひ、慈鎮が昔より、

鷲の高嶺にすむ月の

入らぬにまよふ人ぞかなしき

とも教へてをる。こゝにも神人同交の意識がやはり現れて居る。であるから私は何うしても宗教は神と人間との一種の關係であると思ふ。其一種の關係は何う云ふ關係かと云ふならば、神人の共在俱存である、或は神人の接觸同交又は融合歸一の實意識であると云ふてもよ

い。さうして此神人の接觸同交を圖る手段として祈禱も起つて來ますれば宗教上の色々の儀式も起つて來るのであります。熊祭の如きも聖晚餐式の如きも亦神人の接觸同交を圖りたい精神から起つたのである。斯う云ふ風で宗教上の色々の儀式の起と云ふことも自然お分りであらうと思ひます。

私は成可く略しまして申し上げまして、宗教の本尊たる神と云ふことに就いては餘り申さなかつたのであります、けれども、段々話して居ります中に、或は幼稚なるアイヌの宗教の話も出ますし、或は進んだ基督教の話も出ますし、或は佛教に現れた神—佛教の場合には印度が知的であるために佛と云つて居るので、之も神であります、則ち佛教の所謂佛のやうなものも、たゞ神と云ふ大きな言葉の中に包んでお話しただので、その中には基督教のゴッドも這入れれば、アイヌのカムイ即神も

這入つて居るのであります。故に私共の爰で謂ふ神といふ概念は極めて廣いのであります。してさう云ふ神と人間との接觸同交又は共在俱存若くは融合歸一と云ふことが宗教の最も大切な點であつて、是れが有れば宗教と云ふことが出来るのであります。丁度學校の徽章を附けて居れば何處其處の學校の學生といはれる様に神人の融合歸一或は共在俱存と云ふことが總ての宗教に共通であるから、之を基準にして宗教の事を考へるのが一番宗教の特色を擷んだものであると私は考へるのであります。そこで宗教學者は斯ういふ方面から宗教の何たるかを考へてをる。して此歸納的研究に依つて宗教の概念を決めまして、然る後に神道は宗教であるか何うか、神社は宗教であるか何うかと云ふことをきめて行く可きで、さうすると餘程其等の事を論じます際にも議論が捗りはしまいかと考へます。然うでないとい甲

の人は只基督教なら基督教だけに就いて考へて之を一般に宗教だと思ひ乙の人は佛教だけに就いて考へて之を以て宗教だと思つて了ひ、其處で甲乙間の思想に大徑庭を起して、何時まで經つても甲乙兩者間の議論が決しないことになりはせぬか。それを決するには矢張世界にどれだけの宗教があるかといふことを調べて、今申した一切の宗教の共通點である其大切な點を擷んでさうして他の現象と之を比較して始めて宗教の何たるやも決められるのではないかと思ひます。宗教學者は宗教を斯くの如く觀てをるといふことをお話致しましたならば、其等の事に心を用ひてお出でになる御方の多少とも御參考にならうかと思ひまして、甚だ未熟な考でありますけれども一應申上げた次第であります。勿論是れには色々議論のあることでありますから又いろ／＼違つた御考もあらうと思ひますし、又其等も謹んで拜聽

致しまして自分の足らぬ處を補ひたいと思ふ次第であります。

二

戦争と宗教

戦争と宗教との關係——宗教の二大別——國民的宗教と國家的觀念——古代希臘羅馬の軍神——古代イスラエルの軍神——古代ゲルマン民族の軍神——古代日本の軍神——回々教及儒教と國家思想——世界的宗教と國家的觀念——基督教と國家思想——佛教と國家思想——宗教と正義人道の觀念——佛教の人道主義——佛教の博愛慈悲心——基督教と正義の觀念——佛教と正義の觀念——正義人道の爲の戦争——佛教と戦争の觀念——禪と日本武士道——他力佛教と戦争——基督教と戦争の觀念——基督教の眞精神——日本の基督教徒——現下の歐洲戦亂と宗教問題——民族の發展と國民的宗教——國民道徳と世界主義との調和——歐洲戦亂と信界の動搖——現代思潮と神社崇拜の不徹底

戦争と宗教といふことを耳にすると、忽ち斯ういふ疑問が起るであらうと思ふのであります。元來宗教は世界的、普遍的のものであつて、國家の上に超越して居るものである。是に反して戦争は國と國との間に起るものである。少なくとも、内亂の場合などを取除けばさうであるし、殊に今回の戦争の如きは全く國家と國家との間に起つた一つの争闘であります。それであるから國家と國家との間に起つた戦争と、元來國家を超越して世界的、普遍的の位置に立つて居る宗教とは、何等の關係も無いであらうといふやうな考が直ぐ起りますし、又もう一步進んで寧ろ宗教は國家以上に立つて居るものであるから、絶對的に戦争は否認するものではなからうか、殊に佛教にせよ、基督教にせよ、或は慈悲を説き、或は博愛を教へ、人類一般を我同胞兄弟と見るのであるからして、其間に戦争などあるべきでなく、又それ等の人が互ひに戦

争などをしてはならぬといふことは勿論であるからして、宗教の立場は詮ずる所非戦論にならなければならぬと、斯ういふ考が起るのであります。殊に基督教に就て云ひますならば、耶蘇は「惡に敵する勿れ」と教へて居るのみならず、若し敵が來て自分の右の頬を打てば左の頬をも向けて是に打たせよ、又下著が欲し云といふて來たならば、上著まで脱いで是に與へよ」と教へて居るのであるから、基督教の立場から云へば戦争などは是認すべき餘地がないのであつて、天に坐ます父なる神が善き人にも惡しき人にも一樣に太陽の光線を惠み、善人にも惡人にも一樣に雨を降らし給ふ如く、一視同仁博愛平等の考を以て他人に接しなければならぬ以上は、干戈を執つて他人の生命を取るといふやうな戦争は絶對的に之を非認せなければならぬ事となるからして、宗教の眞の立場は絶對的非戦論となつて現はれなければならぬと考へる

人もあるであらうと思ふのであります。又佛教に就て考へましても、其慈悲の及ぶ所は禽獸蟲魚の上にまで至つて居るのであつて、殺生戒といふ戒律の如きは佛教の五戒の第一番に擧げてある所のものであるから、人の生命を取遣りする戦争の如き事は絶對的に否認するであらう、して見れば宗教の立場は國家以上に超越して居る爲に獨り戦争などは雲烟過眼視し對岸の火災の如く見て居るばかりでなく、尙ほ進んで非戦論にならなければならぬといふ所の人があるやうであります。少なくとも宗教と戦争の關係といふ事を耳にするといふとさういふ事を頭腦に浮べる所の多くの人があつてであらうと思ふのであります。是は畢竟國家對宗教の問題であります。宗教と國家の關係問題であります。又別の言葉で申しますならば、宗教と國民道德の關係問題と申しても差支ないと思ふのであります。國家主義と世界主

義の矛盾であるといふても宜からうと思ふのであります。併し宗教は斯の如く絶對的非戦論を採らなければならぬものであるか、又世間の人の思ふ通り宗教は國家以上に超越して居るから、戦争に對して假令絶對的否認論を採らないにしても、そんな蝸牛角上の小なる争や一國の興廢存亡といふやうな小なる問題は世界的普遍的の主義を抱いて居る宗教に取つては蚊の涙ほども痛痒を感じないものであると、斯ういふことが眞理であるかどうか、是は大に研究を要する事と思ふのであります。それで此點に就て聊か左に卑見を具陳して見ようと思ふのであります。

そこで此問題を解釋するには、宗教と申しましても一様でなくして、其中にはいろ／＼種類があり、高い發達をなして居る宗教もあれば又低い幼稚な階段に止まつて居る宗教もありますし、一國民々々に限

つて信ぜられて居る所の宗教もありませんし、又世界の有ゆる人類を一樣に濟度しようといふ事を理想として居る宗教もありません。一國民だけ相手の宗教は之れを宗教學者は國民的宗教と名を付けて居りますし、世界萬民を救はうといふ目的を有つて居る宗教は世界的宗教又は普遍的宗教と稱して居ります。實例を以て御話すれば基督教や佛教の如きは世界的宗教に屬するのでありますし、是に反して佛教や基督教の出ない以前に或は希臘人、或は羅馬人、或はイスラエル人、或は印度人、埃及人、アッシリヤ人、バビロニヤ人等の間には是等の民族、國民が信じて居つた所のそれ、固有の宗教があるのであります。是等の宗教は皆其國民に限つて信ぜられた所の宗教であつて、所謂國民性を帯びた所の宗教でありますからして、國民的宗教と申すのであります。基督教、佛教が生れて來る前に各國ともさういふ國民的宗教を有つて居

つたのであります。

そこで少なくとも宗教には此二種があるといふことを記憶しなければならぬのであります。して世界的宗教である佛教や基督教の事に關しては後に申しますが、先づ第一に此二種の宗教の中で國民的宗教と國家との關係はどうであるかといふと、是は申すまでもなく其宗教が世界人類などといふ廣い理想を有たない前の知識發達の階段に現はれた宗教でありますから、或は希臘人、或は羅馬人、或はイスラエル人、或は埃及人、或はアッシリヤ人、バビロニヤ人といふやうに其國民國民だけに適合するやうな宗教になつて居るのであります。従つてそれが國家思想や國民精神と矛盾しやう筈がないのであります。其神様は皆其一國民々々々を特別に保護し給ふ所の國民の守護神といふ風になつて居るのであります。所謂一國の鎮守の神であります。さう

いふ風に其國民だけを特に守護し給ふ所の神様を奉じて居る國民的宗教が其國家思想と矛盾しよう理由がないのであります。

それであるから古代の希臘人はトロヤーといふ所に向つて其戦争を布告しトロヤー人の暴虐を抑へようと思つて大軍を希臘から小亞細亞のトロヤーに送つた事がありますが、其時希臘人の奉じて居つた神々は皆希臘人を助けて居るのであります。殊に其中には戦争の事を専門に掌つて居る所の希臘の軍神さへあります。此軍の神の事を希臘人はアレストレスと呼んで居つたのであります。又羅馬に参りましても同じく戦争の神はあるのであります。殊に羅馬人は段々其國威が發展して他國民を侵略する爲に屢々大軍を起す事も少なくなかつたのであります。羅馬人の軍神はマルスMarsといふて居りました。イスラエル——即ち將來基督教を生み出しました猶太の元の名前

古代希臘
羅馬の軍
神

古代イス
ラエルの
軍神

である——に参りましても此關係は同一であつて、イスラエル人はエホバ即ちヤーエー Jahve といふ神を尊信して居つたのであります。此ヤーエーはイスラエル民族の特別守護神であつたのであります。イスラエル人が戦争に参ります時にはヤーエーは何時も一緒にイスラエル人といつて行つて、イスラエル人を保護するものと考へて居つたのであります。そこでエホバが賜ふたと考へて居つた所の十誡を彫り付けた石を納めてある所の神の櫃即ち英語で申せばアーク Ark といふて居るのであります。其契約の櫃は丁度日本で昔日吉山王の神輿を比叡山の坊さんが擔いで京都に攻入つたやうに、古代のイスラエル人はヤーエーが乗移りヤーエーが這入つて居られると思ふて居る契約の櫃即ちアークを擔いで、さうして他國民に對して戦争に出かけて行つたのであります。そこで宣戰講和の權は皆ヤーエーにある

と彼等は信じて居つたのであつて、ヤーエーは無形の君主の如き位置をイスラエル人に對して有つて居つたのであります。即ちヤーエーは元はシナイの山に現はれた嵐の神でありましたけれども、後にイスラエル民族が國家を形造るやうになつてからは國家の守護神であり又イスラエル民族の軍神といふ風になつて參つたのであります。又北歐羅巴即ちゲルマン民族の間に這入つて考へて見ましても矢張りその有様は同様であつて、オデン Odin といふ神様は彼等が一番えらい神様として居る神であります。矢張り一方戰の神でありまして、其像は恰も戰場に立つ勇士のごとく甲冑を被り、手に劍戟を携へて居る所のものでありまして、矢張り戰の神であります。それであるからして戰場で以て名譽の戰死を遂げた軍人や又負傷した所の勇士は直にオデンの極樂であるヴルハラ Valhalla に往生してオデンと共に天

上の快樂を恣にすることが出來ると考へられて居つたのであります。それであるからオデンは矢張り古代のゲルマン民族に幸ひする所の軍神といふことになつて居るのであります。

日本の如きも同様であつて、神代の昔から傳つて居る所を見ますといふと、彼の武甕槌神、經津主神の如きは明かに軍神であります。敵を随分追窮遊ばす所の猛き軍の神様であります。殊に武甕槌神は建御名方神を信州諏訪まで出雲附近から追ひかけて御出でになつて、到頭信州諏訪で以て建御名方神を降服させたといふことが傳はつて居るのであります。斯ういふ風に日本に於きましても矢張り戰爭の神即ち軍神が古來あります。殊に日本に於ては欽明天皇の十三年に佛教が渡來しました時、佛教の教へが本當だから信ずるとか、間違つて居る即ち嘘だからして之を信じないといふやうなことが問題になつたの

ではなくして、日本には昔から天地八百萬神がある、是等日本の國家に特有な關係を有つて居る日本固有の神々がある、所謂國家の神がある。然るに是等の國家守護の神を差措いて佛教の佛即ち隣國の神である蕃神を祭つたならば必ず國神の怒りを買ふであらうといふことが口實で、蘇我氏に反對した物部氏は佛教を排斥して居るのであります。それであるから神道は日本の國家と結び付いた一種の國民的宗教であります。少なくとも神道を廣い意味に解釋するならば、日本固有の國家的宗教は矢張り其一部を形造つて居つたといはなければならぬと思ふのであります。斯ういふ風に國家と宗教が密接な關係を有つて成立つて居ります以上は、國家と宗教が矛盾しよう筈もなく、國家が若し戰爭を開く場合に於てはイスマエルのエホバ即ちチャーエーが其國民を戰爭場裡まで送つて行つて守護し給ふ所の特別守護神と云ふ

風になるのでありますから、國民的宗教と國家の關係は極めて密接で、それが矛盾するかどうかと云ふ如きことは寧ろ問題ではないと思ふのであります。

斯かる國民々に固有の宗教である國民的宗教が其國家の爲めに盡して、又他を顧みないといふ事は敢て怪むに足らぬのであつて、隨て國民的宗教は國家に向つて其用をこそなせ害をなすなどといふやうな事はない譯であります。故に國民的宗教に就ては國家と宗教の關係問題などは毛頭其必要を見ないのであります。國家と宗教は初から不可分離的關係を有つて存在し、頗る密接なる關係のあることは所謂唇齒輔車の關係であつて、是等の國民的宗教が國家と矛盾衝突すべき理由は寸毫もないのであります。又事實有り得べからざる事で實際無かつたのであります。

但し茲で一吋附加へて置きますが、回々教が非常に劍と火を以て其教へを弘通し、教主モハメツド以來回々教は隨分宗教戰爭をやつて居ります。是は一吋門外の方から考へるといふと、妙なので、回々教は一吋見ると希臘の宗教、羅馬の宗教、イスラエルの宗教、又日本の神道の如く國民的宗教である如く見えませうけれども、是は決してさうではないのであつて、回々教は元來基督教と猶太教を調合して起つたやうな質の宗教であつて、其根本精神は普遍的、世界的にもなつて居るのであります。即ち回々教の本尊であるアラール Allah といふ神様は卓爾として諸々の神の上に超越して存在し、必ずしも亞刺比亞人からばかり崇拜さるべき神様でなくて、世界一般の人々も此神を信じて差支ない所まで進んで來て居るのであります。それであるから回々教は基督教や佛教と同じやうに世界的、普遍的の宗教といふても先づ差支ないと

思ふのであります。併し此宗教が戰爭と非常に密接な關係のあるのは、彼の國民的宗教が國家を防禦するといふ立場からして、戰爭と密接な關係があるのとは餘ほど違つて、其世界的、普遍的宗教を一般人民に布かうといふ爲めに、其事を聞いて直に是に應じて來る人々は差支ないものでありますけれども、若し回々教の教へに抵抗する者があれば、是等を改宗させて回々教を奉ぜしめようとする爲めに、此に回々教の中に宗教上の戰爭が起つて來るのであつて、回々教徒が干戈を執つて立つといふのは其爲めであります。それであるから回々教の中に如何に宗教的戰爭が餘計あつても、之を以て回々教を國民的宗教であると誤解してはならぬのであります。回々教は最早國民的宗教ではなくして、立派に世界的、普遍的宗教となつて居るのであります。但し之を佛教や基督教に較べるといふと、丁度孔子の教が世界的の教へであり、

その仁の教は毫も國民とか國家とかいふのに關係なく、寧ろ廣く世界人類を相手にして居る如く見ゆるにも拘らず、孔子の教へが依然支那式であつて支那の國民性と全然手を絶つことが出来ない有様になつて居るのでありますからして、孔子の教へは半ば普遍的半ば國民的と申さなければならぬと思ふのであります。是と同様に回々教は其根本原則に於ては普遍的、宗教でありますけれども、亞刺比亞人の信者を先づ其眼中に置いて居る所は依然孔子の教へと同じく半ば普遍的宗教と申さなければならぬのであります。是れ孔子の教へが元來國家主義の所があるから日本に渡つてからも日本の國家主義とさう矢鱈に矛盾することなく、其渡來の時に際しても佛教の渡來とは餘ほど様子が違つて、欽明天皇の朝に其教へを採用するかしないかといふことが佛教に就ては非常に議論されたやうに、儒教に就ては其教へを採用

するかしないかをさうやかましく議論されなかつたのも孔子の教へが國家主義であつて隨て日本の國家主義、國民思想とも或點では結び付き易い方面があつたからであると思ふのであります。

是に反して佛教に至つては全然普遍的の宗教であり世界的の宗教でありますから、日本の國家思想とどうも拮据相容れない趣があつて、終に彼れが如き衝突を來したのであると思はれる節もあるのであります。無論欽明天皇の朝に於ける佛教渡來の場合の衝突は宗教上の衝突といふよりも蘇我氏と物部氏との政治上の意見の衝突、政權の爭奪といふことが主であつて、佛教は其渦中に投じて、あゝいふ趣を呈したといふ有様があるのであります。兎に角佛教は世界的普遍的の宗教であるから、その當時日本では佛教の神を奉ずる時は國家の神様から怒られるであらうといふ異論が出たのも必ずしも偶然でないと思

ふのであります。斯様に佛教は純粹の世界的の宗教でありますし、又普遍的の教へであります。是と同様に基督教も亦純乎たる世界教でありますし、又普遍的の宗教であります。既に佛教は印度といふ國民、印度といふ國家を超越して居りますし、基督教も猶太民族といふ民族以上に超越してしまつた教へであります。猶太の國家以上に立つた教へであります。斯の如く超國家的の教へであるからして佛基兩教といふ宗教が國家思想國民精神と時に矛盾するものがないともいへないのであります。

元來佛教や基督教の普遍主義、世界主義に此非國家的方面があるのはどういふ原因に基づくかと考へて見ますといふと、先づ猶太に於て基督教が発生した當時の情況を考へて見なければなりません。之れを考へて見ますといふと、もう既に猶太の國家は支離滅裂、秋風落葉の

感があつたのであります。既に耶蘇が出ます前四五百年の昔に於て猶太の國家は事實上亡びてしまつたのであります。それが又幾らか後に回復され、細々ながら其餘生を保ち奄々たる氣息を繋いで参つたのであります。處が其後羅馬の屬國の如くなつてしまつたのであります。が、さういふ風に猶太人の國家が將に亡び様として居る其處に耶蘇が生れたのであります。猶太人は元來何れかといふと、なか／＼現世主義の民族であつたのであります。印度人とは趣が違つて國家本位の民族であつたのであります。それであるからして猶太人は其昔に於ては宗教上の救主は、決して神變不可思議の超人間的怪物ではなくして、有力なる國家の王様であると考へて居つたのであります。具體的に申せば猶太人の堯舜とでもいふべきダビデ王やサロモ王の如きえらい王様が出て、さうしてアッシリヤ人やバビロニヤ人や或は波